

坂戸市

稲荷前遺跡B区Ⅱ

都市基盤整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

— X II —

2002

都市基盤整備公団
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発刊に寄せて

都市基盤整備公団では、美しく安全で快適なまちづくりをめざし、高水準の居住環境の実現を進めております。

むさし緑園都市坂戸ニューシティにつきいは、埼玉県のはほぼ中央部に位置する坂戸市に計画された、特定土地地区画整理事業区域であります。坂戸市は、都会的な生活と自然との調和をとりながら、「豊かさと安らぎに満ちた文化都市」をめざして発展しております。

都市基盤整備公団では、「週日＝ON」と「週末＝OFF」を使いわけ新しいライフスタイルをバックアップする街づくりを計画し、「緑とせせらぎの街」を基本テーマに、道路や下水道などが整備された都市基盤をベースとする、住宅・各種施設・自然が調和した複合多機能型都市空間の実現をめざしております。

周辺地域の豊かな水のイメージを「水のネットワーク」として取り込み、緑豊かな景観と一体化した「緑のネットワーク」で街を彩り、計画的に公園・文化施設などを設置し、毎日のくらしにやさしい街を演出してまいります。

坂戸市には数多くの文化遺産が残されており、悠久の歴史を誇っております。

坂戸ニューシティにつきい地区においても、先人たちの足跡が多く残されていると聞いております。このたび特定土地地区画整理事業に先立って、埋蔵文化財の発掘調査を実施しましたところ、古墳時代から平安時代の竪穴式住居跡や土器などが多数発見されました。

この報告書は、その発掘調査の成果をまとめたものであります。県民のみなさまの教育・文化向上のために御活用いただければ幸いです。

平成14年3月

都市基盤整備公団埼玉地域支社

地域支社長 鈴木 貴雄

序

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しいくづくり」を基本理念に、県民一人ひとりが真の豊かさを実感できる「豊かな彩の国づくり」に向けたさまざまな施策が展開されております。そのひとつとして、快適でうるおいのある生活空間の形成をめざし、「新しい魅力あるまちづくり」「環境と共生したまちづくり」「人にやさしいまちづくり」などの生活空間の整備が進められております。

坂戸入西地区土地区画整理事業は、住宅・都市整備公団（当時）によって「美しく安全で快適なまちづくり」がめざされ、住宅政策や地域環境の整備計画の一環として計画されました。

坂戸入西地区土地区画整理事業用地内には埋蔵文化財包蔵地の所在が知られており、その取り扱いについては、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課が各関係機関と慎重に協議をかさねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講ぜられることとなりました。そのため、当事業団が都市基盤整備公団の委託を受け、発掘調査を実施することとなりました。

坂戸入西地区土地区画整理事業に先だってすでに12遺跡の発掘調査が行われ、古墳時代から古代の集落跡や方形周溝墓、中世の鑄造遺構などの貴重な発見がありました。今回の調査では、堅穴住居跡や土器が発見されました。先の調査と合わせて稲荷前遺跡の全貌が明らかにされ、古代の集落跡や古墳時代の方形周溝墓群を考える上で貴重な資料を加えることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発や教育機関の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました都市基盤整備公団、坂戸市教育委員会、並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 中野健一

例言

1. 本書は、埼玉県坂戸市に所在する稲荷前遺跡B区IIの発掘調査報告書である。

2. 遺跡のコード番号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

稲荷前遺跡 (No.27-121)

坂戸市大字竹之内字稲荷前141番地他

平成13年4月16日付 教文第2-8号

3. 発掘調査は、都市基盤整備公団坂戸入西地区土地地区画整理事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、都市基盤整備公団埼玉地域支社埼玉西部開発事務所への委託を受け、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 坂戸入西地区土地地区画整理事業関係埋蔵文化財の既刊発掘調査報告書は以下の通りである。

『金井遺跡』(1989)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集

『広面遺跡』(1990)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第89集

『塚の越遺跡』(1991)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第101集

『稲荷前遺跡(A区)』(1992)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第120集

『桑原遺跡』(1992)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第121集

『中耕遺跡』(1993)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第125集

『足洗遺跡』(1994)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第136集

『稲荷前遺跡(B・C区)』(1994)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第145集

『金井遺跡B区』(1994)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第146集

『田島・棚田』(1995)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第147集

『金井遺跡B区II』(2000)

埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書 第249集

5. 本事業は、I-3に示す組織により実施した。

発掘調査事業は、平成13年4月9日から平成13年5月31日まで実施し、宮井英一・岡本健一が担当した。

整理報告書作成事業は山本靖が担当し、平成14年2月1日から平成14年3月22日まで実施した。

6. 遺跡の基準点測量は株式会社シン技術コンサルに委託した。

7. 発掘における遺構撮影は宮井・岡本が、遺物写真は山本が撮影した。

8. 出土品の整理および図版の作成は山本が行い、宮井・上野真由美・中嶋淳子の協力を得た。

9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、ほかを山本が行った。

10. 本書の編集は、山本が行った。

11. 本書にかかる資料は、平成14年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

12. 本書の作成にあたり、坂戸市教育委員会から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。

凡例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X・Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。2. グリッドは座標に基づき、10m×10m方眼を設定した。各グリッドの呼称は北西隅の杭番号である。A-1グリッドの座標値はX=-3,650m、Y=-42,470mである。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
SD…溝跡 SK…土壌 SJ…住居跡
P…ピット
4. 遺構挿図の縮尺は、次のとおりである。例外的なものについては、個別に示した。
調査区全図…1/200
稲荷前遺跡B区全図…1/600
稲荷前遺跡全図…1/1200
住居跡…1/60 土壌…1/60
溝跡平面…1/100 溝跡断面…1/60
5. 住居跡の主軸は、カマドが設置された壁と直交する軸線とし、主軸方位は座標北を基点に、東西に偏する角度を示した。
6. 土層図に示したレベル数値は、すべて標高(m)を表す。
7. 遺物挿図の縮尺は、次のとおりである。例外的なものについては個別に示した。

土器・陶磁器・板碑・瓦拓影図…1/4

須恵器拓影図・埴輪拓影図…1/3

砥石・大型石器…1/3

鉄器・石器・古銭・縄文土器拓影図…1/2

9. 土器実測図の網かけは次のとおりである。

10%…施釉・釉付着範囲 付着物範囲

20%…赤彩範囲

10. 遺物観察表は次のとおりである。

・口径・器高・底径の計測値の単位はcmである。

()内の数値は、口径・底径が推定値、器高は残存高を示す。

・胎土は肉眼で観察できる物質について、以下のように示した。

A…石英 B…長石 C…雲母

D…白色針状物質 E…白色粒子

F…赤色粒子 G…黒色粒子

・焼成は3段階に分けた。

A…硬質・堅緻 B…良好 C…劣・脆弱

・色調は、『新版標準上色帖 1997年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修)に照らし、最も近い色相を記した。

・残存率は5%単位で表した。

目次

発刊によせて	II 遺跡の概要	13
序	III 遺構と遺物	21
例言	1. 住居跡	21
凡例	2. 土壌	25
I 発掘調査の概要	3. 溝跡	40
1. 調査に至るまでの経過	4. ピット	49
2. 発掘調査・報告書作成の経過	5. グリッド・表採遺物	51
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	V まとめ	55
II 遺跡の立地と環境		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第16図 土壌(6)	34
第2図 地形断面模式図	5	第17図 土壌(7)	36
第3図 入西地区の遺跡分布	3・4	第18図 土壌出土遺物	38
第4図 周辺の遺跡	10	第19図 B区第18号溝跡遺物出土状況	41
第5図 稲荷前遺跡B区第II次全測図	14・15	第20図 B区第18号溝跡	40・41
第6図 稲荷前遺跡B区全測図	16・17	第21図 B区第14・15・17号溝跡	42・43
第7図 稲荷前遺跡全測図	18・19	第22図 B区第12・13・19号溝跡	44
第8図 B区第90号住居跡	22	第23図 B区第19号溝跡遺物出土状況	45
第9図 B区第90号住居跡出土遺物	23	第24図 B区第16号溝跡	46
第10図 B区第91号住居跡	24	第25図 溝跡出土遺物	47
第11図 土壌(1)	25	第26図 ピット	50
第12図 土壌(2)	26	第27図 グリッド遺物	52
第13図 土壌(3)	28	第28図 表採遺物	53
第14図 土壌(4)	30	第29図 縄文土器	54
第15図 土壌(5)	32	第30図 石器	54

表目次

第1表 入西遺跡群一覧表	8	第5表 溝跡出土遺物観察表	47
第2表 稲荷前遺跡B区II 遺構新旧対照表	12	第6表 グリッド遺物観察表	53
第3表 B区第90号住居跡出土遺物観察表	23	第7表 表採遺物観察表	53
第4表 土壌出土遺物観察表	39		

図版目次

図版 1	稲荷前遺跡B区II調査区遠景 稲荷前遺跡B区II調査区全景	B区第100号土壌 B区第100・110号土壌遺物出土状況
図版 2	稲荷前遺跡B区II調査区近景 B区第90号住居跡 B区第90号住居跡カマド B区第90号住居跡遺物出土状況 B区第90号住居跡遺物出土状況	図版 6
図版 3	B区第91号住居跡 B区第62号土壌 B区第63号土壌 B区第64・65号土壌 B区第66号土壌 B区第67号土壌 B区第68号土壌 B区第69号土壌	B区第99号土壌 B区第14・15号溝跡 B区第18号溝跡 B区第18号溝跡遺物出土状況 B区第18号溝跡遺物出土状況 B区第19号溝跡遺物出土状況 B区第19号溝跡遺物出土状況 B区第19号溝跡遺物出土状況
図版 4	B区第70号土壌 B区第75号土壌 B区第76号土壌 B区第77号土壌 B区第78号土壌 B区第79号土壌 B区第81・82号土壌 B区第83号土壌	図版 7
図版 5	B区第84号土壌 B区第85号土壌 B区第90・91・92号土壌 B区第93号土壌 B区第94号土壌 B区第110号土壌	図版 8
		B区第90号住居跡出土遺物 B区第110号土壌出土遺物 B区第18号溝跡出土遺物 B区第19号溝跡出土遺物
		図版 9
		B区第18号溝跡出土遺物 D-2 Gr 遺物 C-3 Gr 遺物
		図版10
		D-5 Gr 遺物 C-7 Gr 遺物 E-7 Gr 遺物 E-4 Gr 遺物 D-7 Gr 遺物
		図版11
		表採遺物 C-3 Gr 遺物 石鏃 打製石斧
		図版12
		土壌出土縄文土器 縄文土器

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では、人口増加に対応するため、都市基盤整備公団を中心に住宅政策及び地城環境整備計画が進められている。

坂戸市西(西部)地区については住宅・都市整備公団(当時)による区画整理方式により宅地開発事業が計画された。

住宅・都市整備公団では、昭和40年に当時の日本住宅公団と文化財保護委員会との間で交わされた「日本住宅公団の事業施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱に関する覚書」に基づいて、埼玉県教育委員会へ「坂戸市西(西部)地区における埋蔵文化財取扱について」照会した。

埼玉県教育委員会では、昭和56年1月20日付け教文第918号で次のとおり回答した。

1 文化財の所在

名称 (Na)	所在地	種別	時期
坂戸市Na99 塚塚古墳	坂戸市大字堀込 字桑原157	古墳	古墳時代 後期

上記の他に条里遺跡及び畑地部分に集落遺跡の存在が予想される。

2 取扱について

- (1) 開発予定地内は事前の遺跡分布調査及び必要に応じて試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する必要がある。
- (2) 上記の結果をもとに埋蔵文化財ができるだけ現状保存できる開発計画を策定することが望ま

しい。

- (3) 計画土やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財の発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施すること。

住宅・都市整備公団と埼玉県教育委員会では、開発地城内に所在する埋蔵文化財の取扱について協議を重ねた結果、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して、昭和59年度から発掘調査を実施することとなった。

稲荷前遺跡の調査は昭和61年4月1日から平成元年3月31日まで行われ、すでに発掘調査報告書も刊行されている。しかし、墓地の移転が遅れたことから、平成13年4月8日から5月31日まで再度発掘調査を実施し、今回報告書を刊行することとなった。

発掘調査に先立って文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が¹都市基盤整備公団埼玉地域支社長から提出され、第57条1頁の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

稲荷前遺跡

平成13年4月16日付け 教文第2-8号

(文化財保護課)

2 発掘・整理報告書作成の経過

発掘事業

稲荷前遺跡B区IIの発掘作業は、平成13年4月9日から平成13年5月31日まで実施した。調査面積は1,530㎡である。

4月9日から現場事務所の設置を始めた。

4月10日から重機による表土掘削作業を開始し、4月16日に終了した。引き続き、基準点測量作業や囲構工事を施工した。

表土除去作業と併行して、4月12日から補助員による遺構確認作業を順次開始した。確認された遺構は、遺構掘削および遺構精査を行いながら、写真撮影や遺構断面図・遺構出土遺物分布図等の実測作業も行っていった。

調査区域は昭和61年度～平成元年度に発掘調査を実施することができなかった未調査区域である。既調査区の北側に隣接し、既調査の成果から、方形周溝墓をはじめとする遺構の存在が予想されていた。しかし現代まで墓地として利用されていたために著しく攪乱され、本来存在していたと想定される遺構や遺物のほとんどが失われていた。予想よりも遺構数や遺物数が少なかったため発掘作業が順調に進み、当初予定していた調査期間を1ヶ月短縮して、5月末日で終了することとなった。

5月には、写真撮影や遺構断面図・調査区の平面図実測等の記録作業も完了した。その後、遺構の埋め戻しを行って安全対策を図り、囲構や現場事務所等の撤去を行い、5月31日に発掘作業はすべて終了した。

整理・報告書作成事業

稲荷前遺跡B区IIの整理・報告書作成作業は、平成14年2月1日から平成14年3月22日まで実施した。

2月上旬には、出土遺物および各種記録類の搬入を行った。遺物は水洗・注記を経て、各遺構ごとに接合を開始した。遺構図面は二次原図の作成に取りかかった。

2月中旬には、人手と三次元測定機を併用しながら接合された遺物の実測図作成作業に着手し、また拓本を要する遺物の拓本作業を実施した。中旬末には、遺物の接合・復元および遺構の第2原図作成作業は終了した。

2月下旬に拓本を要する遺物の断面実測を行い、遺跡全体図・周辺遺跡分布図の作成、遺構写真選択も実施した。また遺物の実測図作成作業は下旬末まで終了し、遺構図と合わせて順次トレース作業を開始した。

3月上旬には、実測図作成作業の終了した遺物の写真撮影、遺構・遺物のデータ処理を開始し、そのデータを基に、表作成作業も始めた。遺構図・遺物実測図のトレース作業も終了し、遺構図面は網掛けや文字記入等の版組作業、遺物図は挿図用版組作業を進めた。併行して、順次、原稿の執筆にも取りかかった。

3月中旬には、表作成作業も終了し、原稿執筆と併行して、割付・編集作業に着手した。

3月中旬に入札を行い、3月下旬の校正作業を経て、平成14年3月22日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘事業

平成13年度

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	大 館 健

管理部

管 理 幹	持 田 紀 男
(庶 務 分 掌)	
主 任	菊 池 久
(経 理 分 掌)	
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二

調査部

調 査 部 長	高 橋 一 夫
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
専 門 調 査 員	村 田 健 二
(調査第一担当)	
統 括 調 査 員	宮 井 英 一
主 任 調 査 員	岡 本 健 一

(2) 整理・報告書作成事業

平成13年度

理 事 長	中 野 健 一
副 理 事 長	飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	大 館 健

管理部

管 理 幹	持 田 紀 男
(庶 務 分 掌)	
主 任	菊 池 久
(経 理 分 掌)	
主 任	江 田 和 美
主 任	長 滝 美智子
主 任	福 田 昭 美
主 任	腰 塚 雄 二

調査部

調 査 部 長	高 橋 一 夫
調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
主 席 調 査 員	磯 崎 一
(資料整理担当)	
主 任 調 査 員	山 本 靖

Ⅱ 遺跡の立地と環境

地理的環境

稲荷前遺跡は埼玉県坂戸市大字竹之内字稲荷前に所在する。東武東上線北坂戸駅の西方約3kmに位置し、越辺川を臨む毛呂台地北東部先端の低台地上に立地する。標高は約31mを測る。遺跡北側には越辺川によって開析された後背湿地(沖積地)が広がり、肥沃な水田地帯を形成している。水田面との比高差は1.0～1.5mほどである。

遺跡の立地する毛呂台地は外秩父山地から毛呂山丘陵を経て東へ延び、広大に続く関東平野との接点にあたる。この毛呂台地は広義の入間台地に含まれ、北側を越辺川、南側を高麗川に西された、南北約2.5km、東西約5kmほどの東西に延びる細長い台地である。越辺川、高麗川を始め、台地内を貫流するその支流の葛川等の中小河川による浸食を受け、起伏に富んだ複雑な地形を形成している。北側を流れる越辺川の対岸には岩殿丘陵が対峙し、視界が遮られている。高麗川を挟む南側には比較的平坦な扇状地性地形の坂戸台地が広がり、毛呂台地とは対照的な地形を示している。

毛呂台地と坂戸台地を取り巻くように広がる広大

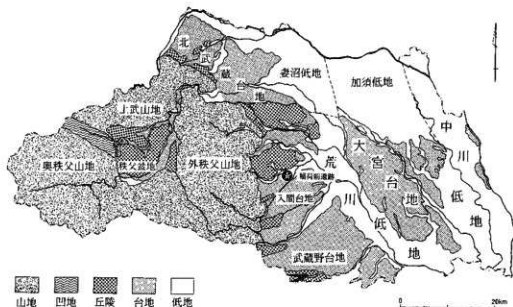
な沖積地は、越辺川とその支流たる高麗川・葛川・飯盛川等の小河川により形成されたものである。この地は入西条里に代表される肥沃な水田地帯として存在し、原始・古代から越辺川右岸に形成された本遺跡も含めた遺跡群を支えてきた大きな要因といえる。

入西遺跡群の概観

坂戸入西十地区画整理事業地内は119万㎡の開発面積におよび、このうち延べ39万㎡の12遺跡が確認されている(入西遺跡群)。稲荷前遺跡のほかに、金井遺跡A区・金井遺跡B区・広面A遺跡・広面B遺跡・塚の越遺跡・桑原A遺跡・桑原B遺跡・中耕遺跡・足洗遺跡・田島遺跡・棚田遺跡が存在する。これらの12遺跡は、その立地面から4分することができる。

塚の越遺跡・金井遺跡B区は稲荷前遺跡よりも一段高い高燥な毛呂台地上に立地する。

塚の越遺跡(2)は古墳時代後期～奈良・平安時代を中心とする集落跡で、縄文時代中期・弥生時代中期の住居跡や前方後円墳1基も検出されている。古墳時代後期の集落では屋外への排水溝を付設した住



第1図 埼玉県の地形

居跡が確認されている。奈良・平安時代の集落は溝によって区画され、住居の構築地は前代の住居跡を意識的に避けて選地した可能性がみられる。中世の建物跡は確認されていないが、多数の井戸跡や常滑産・中国産の陶磁器や瓦の出土、約30mにおよぶ石敷の溝状遺構が構築されていることから、館跡やそれに匹敵する施設が想定されている。遺物は13世紀後半から15世紀のもので、青銅製の五鈔杵や神像も検出されている。また発見された前方後円墳からは川筒埴輪・人物埴輪や土師器が出土し、6世紀後半の築造と考えられている。土師器は破砕された状態で、土器祭式等が執り行われた可能性もたれている。

金井遺跡B区(11)では古墳時代後期～平安時代の集落跡と13～14世紀の鋳造遺構群、14世紀中葉～15世紀の集落跡が検出されている。鋳造遺構の発見は中世の鋳物師集団の生産活動の実体を知る資料として、各方面からの注目を集めている。17カ所の鋳造遺構群が広がり、溶解炉・鋳造土壌・鋳込み跡・補綴え跡・廃滓場や鍛冶遺構・炭焼き跡・粘土採掘跡・建物跡・井戸跡・溝跡によって構成されている。鋳型には日常用品のみならず、梵鐘や仏像・仏具などの豊富な種類が確認されている。また三叉状土製品・半球状土製品・鳥目・トリペ・ハタマワシ・ヘラ・タガや砥石等の鋳造道具も出土している。

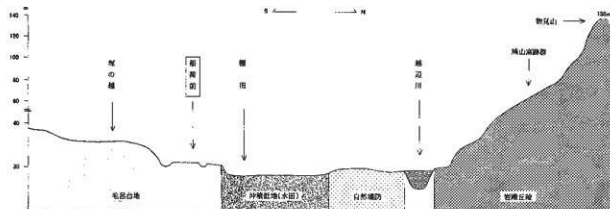
稲荷前遺跡・田島遺跡・桑原A遺跡・金井遺跡A区・足洗遺跡は沖積低地に面した低台地上に立地す

る。

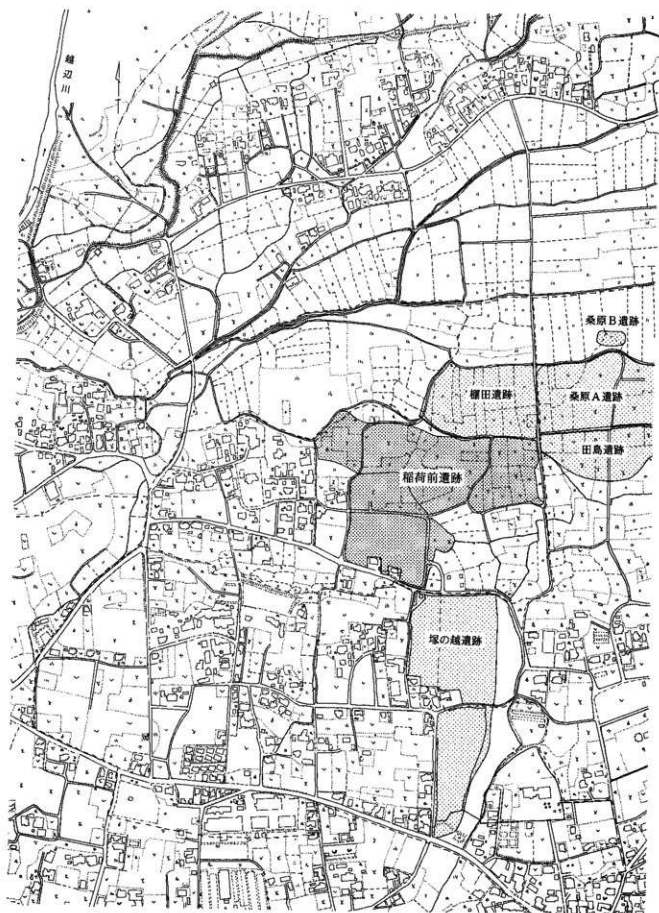
稲荷前遺跡(1)は、北に棚田遺跡、北東に桑原A遺跡、東に田島遺跡、南に塚の越遺跡が隣接する。古墳時代前期の周溝墓群、古墳時代～平安時代の集落および中世の集落が発見されている。

桑原A遺跡(5)は南から北へ開析する谷地によって東西に二分される。東側には方形周溝墓、西側には集落が形成されている。方形周溝墓は北東に位置する広面B遺跡の方形周溝墓群に包括される。集落は越辺川の浸食作用で生じた台地縁辺の崖線を北限とし、東西は浅い谷地、南限は集落の初現段階に設けられた幅2mほどの溝によって画されている。この溝と平行する溝が南北に集落を区画し、複数の石製模造品の出土から、集落内における重要性を想起させられる。時期的には、6世紀中葉を初現とする古墳時代後期集落と、8世紀末から始まる平安時代集落に大別される。古墳時代後期集落は約半世紀ほどの間に建て替えが繰り返され、安定した集落構成が認められている。平安時代集落は溝によって区画され、防御性・計画的性の高い集落展開をみる事ができる。14～15世紀の居住痕跡も確認され、「く」の字に屈曲する溝跡・井戸跡・土城と掘立柱建物跡1棟によって構成されている。

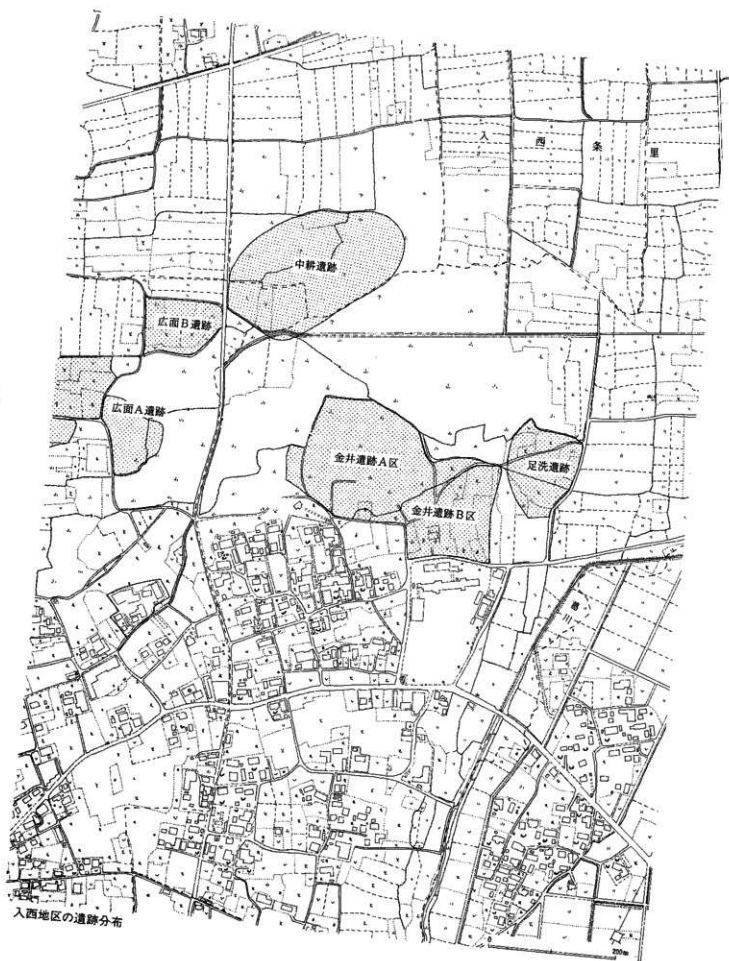
田島遺跡(6)は古墳時代終末期の集落跡と中世の掘立柱建物跡が検出されている。遺跡北端には溝が東西に走るが、これは北側に位置する桑原A遺跡の南限を意図している。集落遺構は遺跡西端に集中し、



第2図 地形断面模式図



第3図



第1表 入西遺跡群一覧表

遺跡名	調査面積(m ²)	S60	S61	S62	S63	H1	H2	H11	H13	主な検出遺構	時期	報告書
稲荷前遺跡	49,500									竪穴住居跡313 掘立柱建物跡84 方形周溝墓35 竪穴状遺構10 土壇521 井戸跡95 溝跡89 敷石遺構2 小鍛冶遺構1 土壇墓1 茶屋跡5	古墳 奈良 平安 鎌倉 室町 江戸	第120集 第145集 第277集
金井遺跡A区	33,000									竪穴住居跡72 掘立柱建物跡17 竪穴状遺構2 土壇547 井戸跡14 溝跡46 環状遺構2	古墳 奈良 平安 室町	第86集
広面A遺跡	10,500									土壇14	古墳 江戸	第89集
広面B遺跡	9,500									方形周溝墓20 土壇49 井戸跡4 溝跡4	古墳 鎌倉	第89集
塚の越遺跡	35,000									竪穴住居跡82 掘立柱建物跡9 前方後円墳1 土壇249 井戸跡35 溝跡43 性格不明遺構5 埋設土器1	縄文 弥生 古墳 奈良 平安 鎌倉 室町 江戸	第101集
桑原A遺跡	30,000									竪穴住居跡102 掘立柱建物跡21 方形周溝墓2 土壇42 井戸跡20 溝跡25	古墳 奈良 平安 鎌倉 室町 江戸	第121集
桑原B遺跡	2,000									土壇1 水田跡 河床跡	古墳	第121集
中野遺跡	35,000									竪穴住居跡87 掘立柱建物跡7 方形周溝墓68 土壇62 溝跡3 性格不明遺構2	縄文 弥生 古墳	第125集
足洗遺跡	16,500									竪穴住居跡39 掘立柱建物跡31 土壇193 井戸跡18 溝跡31 集石土壇3 茶屋跡5 埋設1	縄文 古墳 奈良 平安 鎌倉 室町	第136集
金井遺跡B区	21,700									竪穴住居跡32 掘立柱建物跡36 土壇302 井戸跡17 溝跡65 集石土壇2 茶屋跡16 沼解跡2 鋤遺構群17 粘土探掘坑3 炭焼き室1	古墳 奈良 平安 鎌倉 室町 江戸	第146集 第249集
田島遺跡	27,000									竪穴住居跡6 掘立柱建物跡22 土壇10 井戸跡9 溝跡10	古墳	第147集
棚田遺跡	33,000									竪穴住居跡28 土壇7 井戸跡6 溝跡2 埋設土器2 堀跡 河道跡	古墳 奈良 平安	第147集

西側に隣接する稲荷前遺跡に帰属する内容と思われる。

金井遺跡A区(10)は北～北東に水田と接し、南東～南限・西限は谷地によって囲われている。さらに調査区中央付近に埋没谷が東西に走り、遺構の分布は南北に分割されている。古墳時代後期後半～奈良時代の集落跡で、集落形成には時代ごとの変遷が認められている。中世の井戸跡・土壇・溝跡も検出されている。土壇には中世鋳物師集団の生産に関連するものが含まれ、鉄鍋の鋳型片も出土している。金井遺跡B区と同様の中世鋳物師集団の生産跡と考えられている。

足洗遺跡(12)は金井遺跡B区東側の島状の微高地に形成され、古墳時代後期～奈良時代の集落を中心に縄文時代後期・中世の遺構も検出されている。縄文時代後期の遺構には住居跡1軒・埋蔵1基・集石土壇3基が、中世の遺構には掘立柱建物跡・区画溝・井戸跡・土壇・茶屋跡が見つかる。古墳時代後期～奈良時代の集落は6世紀第1四半期に4軒からなる集落が初現するが、以後は続かず、7世紀第3四半期より再び、本格的な集落が営まれ始める。竪穴住居跡と掘立柱建物跡が建ち並び、住居跡の密集度の高さは短期間の内に建て替えが繰り返された状況を取看することができるとする。

広面A遺跡・広面B遺跡・中耕遺跡は沖積面下に埋没したローム台地上に立地する。

広面A遺跡(8)は当初、塚群の存在が想定された領域であったが、調査の結果、中世の溝跡・土壌・井戸跡が検出されているにすぎない。調査区北半は砂礫層が広がり、氾濫によって生じた旧河道が北東―南西方向に走り、北側に位置する広面B遺跡とは一線を画されている。

広面B遺跡(7)は古墳時代前期の方形周溝墓群であり、生活痕跡が認められない純粋な墓域と位置づけることができる。東西130m、南北90mの範囲に20基の方形周溝墓が群在し、南の谷を隔てて隣接する桑原A遺跡の方形周溝墓2基を含めて構成されている。周溝の平面タイプは四隅切れ・全周タイプを主流に一辺の中央部もしくは一隅にブリッジを設けるタイプや造り出し状の突出部を有する特異なものもある。平面タイプは多形であるが、時期・群等の明確な差違として反映されていない。ほかに近世の井戸跡・土壌・溝跡も検出されている。

中耕遺跡(9)は古墳出現期～前期の方形周溝墓群と集落および縄文時代早期末～中期前半の集落が発見されている。古墳時代の集落は住居跡・掘立柱建物跡・土壌・溝跡から構成され、古墳時代前期の古い段階に集落展開は終焉を迎えている。方形周溝墓は68基を数え、古墳時代集落廃絶後に築造が開始されている。周溝墓の平面タイプには四隅切れ・一隅切れ・全周・一辺の中央部にブリッジを設けるタイプと多形で、前方後方形周溝墓も含まれている。各タイプの分布状況から、先行する廃絶集落域を一括して墓域として確保し、四隅切れ周溝墓を核にいくつかのグループを形成しながら這墓が開始されて状況が看取されている。

桑原B遺跡・棚田遺跡は水田下の沖積地に立地する。

桑原B遺跡(4)では生活痕跡は認められていないが、プラント・オパール定量分析の成果をもとに、古墳時代後期と推定される水田状遺構が検出されて

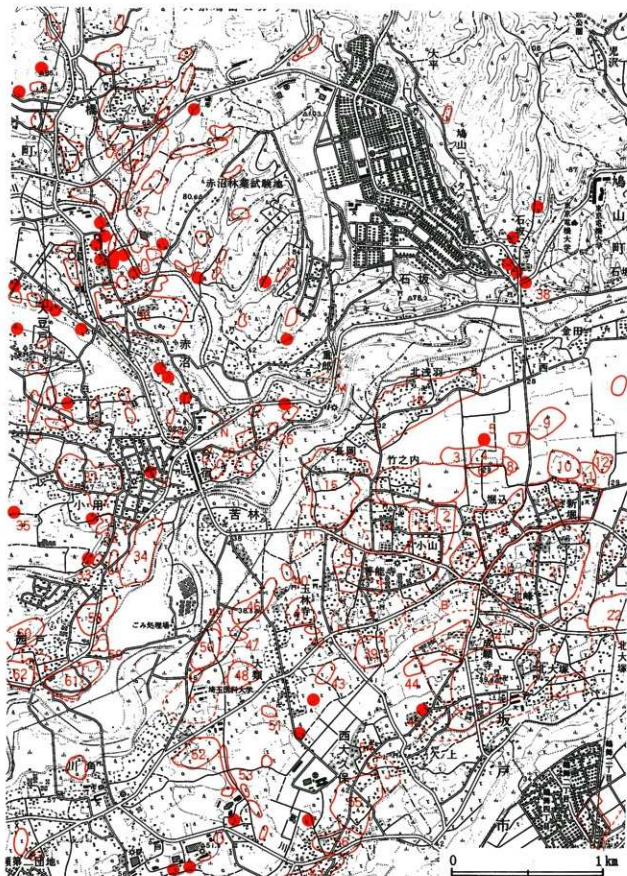
いる。

棚田遺跡(3)は6世紀前半の集落跡で、当該地域におけるカマド導入後間もない時期に位置づけられている。調査区南側の東西に走る溝跡は田島遺跡の南限を示すとともに、東側に位置する桑原A遺跡南側および南東に位置する田島遺跡北側の溝へ続いている。この溝の存在は、集中する稲荷前遺跡・棚田遺跡・桑原A遺跡・田島遺跡を総合的に解明する必要性を迫っている。

このように、坂戸入西遺跡群の12遺跡は立地面から4分できるが、この立地上の差違は遺跡形成の時間的な相違に微妙に反映されている。集落展開に着目すると、低標高の沖積地に位置する棚田遺跡では6世紀前半、埋没したローム台地上の中耕遺跡では古墳時代初頭、広面B遺跡にいたっては居住域として利用されず、低標高の集落は短期間に限定されて継続的な展開がみられない。7世紀以降の集落は稲荷前遺跡・塚の越遺跡・金井遺跡B区・田島遺跡・桑原A遺跡・金井遺跡A区・足洗遺跡といった台地上へ形成されている。古墳時代後期を画期とした集落域の移動の背景に、河川の氾濫被害の回避とともに、可耕地の拡大を意図した積極的な水田開発が推測されている。棚田遺跡集落が6世紀前半代に終焉を迎えた沖積地は、さほどの期間をおかず、7世紀頃と推定される水田状遺構が検出された桑原B遺跡が示すように水田化された状況が認められている。棚田遺跡・桑原B遺跡が位置する沖積地は、「入西条里」水田推定域内に位置している。条里施工時期はともかくとして、古墳時代後期～平安時代まで連続と継続された入西遺跡群集落は、低地内の水田経営が生産基盤として想定される。なかでも、稲荷前遺跡は水田を臨む台地先端部に位置し、水田経営と集落展開の相関関係は想像に難くない。

周辺遺跡の概観

次に、入西遺跡群の周辺地域の歴史的環境に視野を広げるが、各時代の主な遺跡や歴史的環境は、既に入西遺跡群の各報告書によって総合的・網羅的に



第4図 周辺の遺跡

詳述されている。特に、稲荷前遺跡に関連する時期については既報告において詳しく記されている。ここでは、これらの成果を概観するに留めておく。

旧石器時代から縄文時代前期に至る調査例は少ない。このうち入西遺跡群の中耕遺跡から発見された縄文時代早期末から中期前半の集落は好資料といえる。縄文時代中期になって遺跡数や住居跡の検出数が増える。城山遺跡・中小坂遺跡・花影遺跡や鶴ヶ島市脚折山田遺跡・毛呂山町まま上遺跡(55)などが知られている。入西遺跡群でも、塚の越遺跡から加曽利E式期の住居跡が発見されている。しかし、縄文時代後期以降の遺跡は発見例が激減し、塚越渡戸遺跡などわずかな遺構の調査例があるのみである。入西遺跡群の足洗遺跡では後期の住居跡1軒・埋嚢1基・集石土壌3基が発掘されている。

入西遺跡群周辺への弥生文化の波及は中期にいたり、地域的には北関東と南関東の文化圏の接点にあたることから、両系統の土器が出土する。後期になると、埼玉県中西部には縄文で装飾された独特の古ヶ谷式土器を特徴とする文化圏が形成される一方、中期以来の櫛溝文系土器も盛行し、また南関東系土器も混在する。墓制は、壱塚墓も存在するが、方形周溝墓が多く構築されている。

周辺の遺跡

坂戸市

1 稲荷前遺跡 2 塚の越遺跡 3 棚田遺跡 4 桑原B遺跡 5 桑原A遺跡 6 田島遺跡 7 広面B遺跡 8 広面A遺跡
9 中耕遺跡 10 金井遺跡A区 11 金井遺跡B区 12 足洗遺跡 13 稲荷前遺跡 14 花見塚遺跡 15 長岡遺跡
16 善能寺間山遺跡 17 三福寺遺跡 18 堀込氏館跡 19 新堀陣屋跡 20 香匠ヶ谷戸遺跡 21 北峰西遺跡 22 沼端遺跡
23 岩宮遺跡 24 北殿遺跡 25 富上塚遺跡 A 三福寺古墳群 B 大河原古墳群 C 北峯古墳群 D 成瀬古墳群
E 善能寺古墳群 G 塚原古墳群 H 苦竹古墳群 I 塚崎古墳群 J 欠の上古墳

鳩山町

26 色原遺跡 27 統谷遺跡 28 天神台遺跡 29 四反田遺跡 30 毛蔵寺遺跡 31 中島遺跡 32 小用庵寺 33 小用庵跡
34 飯沼遺跡 35 日陰山遺跡 36 中里遺跡 37 鳩山宮跡群 38 夜一山遺跡 M 十郎横穴墳群 N 愛宕神社古墳
毛呂山町
39 前原遺跡 40 神明台遺跡 41 大類氏館跡 42 東園遺跡 43 三角南遺跡 44 常楽寺跡 45 下原遺跡 46 神明台遺跡
47 堀浦遺跡 48 稲荷台遺跡 49 堂山下遺跡 50 崇徳寺跡 51 西ノ久保遺跡 52 苗木原遺跡 53 鎌倉街道跡
54 八坂神社前遺跡 55 まま上遺跡 56 桑地遺跡 57 仏坂遺跡 58 久根下遺跡 59 清後坂遺跡 60 西戸丸山遺跡
61 松の外遺跡 62 愛宕下遺跡 63 西原遺跡 F 大瀬古墳群 K 川角古墳群 L 西戸古墳群

弥生時代末から古墳時代前期には入西遺跡群の稲荷前遺跡・中耕遺跡・広面B遺跡、坂戸市内では長岡遺跡(15)・勇福寺遺跡・附島遺跡・木曾免遺跡が越辺川右岸の沖積地を臨む低地先端に形成される。墓制は方形周溝墓が主体となり、稲荷前遺跡・中耕遺跡・広面B遺跡・勇福寺遺跡・附島遺跡から地域の伝統的な四隅切れタイプから全周形系統へと転換されたことが推定される。器種組成も東海系土器に代表される非在地系土器群が参画し、煮沸形態では南関東系の台付甕が一般化する。墓制・器種組成・集落構成に至るまで、弥生時代的様相が塗り替えた段階と捉えられる。

越辺川対岸では、様々な遺跡様相が認められる。畿内・北陸・東海地域の強い影響を受けた土器群がみられる地域の中核的集落の東松山市五領遺跡、該期の集落と前方後方形周溝墓を含む方形周溝墓群が検出された下道添遺跡、在地の古ヶ谷式土器と外来系の台付甕や小形器台を伴出する根平遺跡や古ヶ谷式土器を主体とする住居跡と前野町式土器を主体とする住居跡が併存する代正寺・大西遺跡などが形成され、弥生時代から古墳時代に転換する複雑な様相を反映している。また、比企地方には県内最古級の山の根古墳、諏訪山29号墳、根平稲荷神社古墳など

の前方後方墳の築造が開始され、中耕遺跡や下道添遺跡の前方後方形周溝群の存在は、地域首長へと飛躍する前段階の地域首長の析出を示すものだろう。

入西遺跡群周辺の古墳時代後期以降の遺跡分布を概観すると、越辺川右岸中流域の稲荷前遺跡周辺、越辺川右岸下流域の坂戸市若葉台遺跡周辺などに中核となる集落群が形成されている。稲荷前遺跡周辺や勝呂庵寺周辺の集落群は7世紀以降10世紀に至るまで、長期にわたって継続する。両地域とも人間域内有数の古墳分布地域で、その背景には越辺川右岸の広大な可耕地の存在とその積極的な開発があり、それを生産基盤とした安定した集落群が営まれている。特に勝呂庵寺周辺地域は7世紀後半段階に勝呂庵寺を建立し得た有力勢力の成長を窺わせる大規模な遺跡群といえる。坂戸市若葉台遺跡周辺は8世紀前半頃に集落が新たに形成されたことが推定される。中核となる若葉台遺跡は可耕地から隔たった内陸部に位置し、四面庇の掘立柱建物跡や円面硯・奈良三彩小壺・和同開珎・帯金具・銅鈴・漆紙文書等の一般

集落からは検出されない遺構・遺物が認められている。直接生産に携わっていた集落とは異なる状況が窺われ、政治的に成立された都衙や官人居宅等の諸説が提案されている。

一方、対岸の越辺川左岸地域には数多くの古墳群と須恵器窯跡が分布する。須恵器生産は6世紀代から桜山窯跡等が断続的に操業され、根平・小用(33)・舞台遺跡では7世紀代の窯跡が検出されているが、系統的な連続性を追うことはできないようである。8世紀になると南比企窯跡群の中核である鳩山窯跡群(37)の生産が開始され、10世紀初頭前後まで安定的な生産体制が維持される。また鳩山窯跡群の工人集落から小鍛冶遺構が発見されており、須恵器工人が鉄生産にも関与していた可能性が指摘されている。

このような歴史的な環境を背景に、古墳時代前期の集落と方形周溝墓群、古墳時代後期から平安時代に連綿と継続する大集落、中世期の集落から構成される稲荷前遺跡が営まれていた。

第2表 稲荷前遺跡B区II 遺構新旧対照表

新番号	旧番号	グリッド	新番号	旧番号	グリッド	新番号	旧番号	グリッド
B区S J90	第II次S J01	D-5 E-5	B区S K80	第II次S K19	D-6	B区S K100	第II次S K39	C-3
B区S J91	第II次S J03	D-3・4	B区S K81	第II次S K20	D-6	B区S K101	第II次S K40	D-3
B区S K62	第II次S K01	D-6	B区S K82	第II次S K21	D-6	B区S K102	第II次S K41	D-3・4
B区S K63	第II次S K02	D-5・6	B区S K83	第II次S K22	D-7	B区S K103	第II次S K42	D-3
B区S K64	第II次S K03	D-5	B区S K84	第II次S K23	D-7	B区S K104	第II次S K43	E-3
B区S K65	第II次S K04	D-5	B区S K85	第II次S K24	D-7・8 E-7・8	B区S K105	第II次S K44	D-3
B区S K66	第II次S K05	D-5	B区S K86	第II次S K25	D-3	B区S K106	第II次S K45	D-3
B区S K67	第II次S K06	D-5	B区S K87	第II次S K26	D-3 E-3	B区S K107	第II次S K46	D-5 E-5
B区S K68	第II次S K07	D-5	B区S K88	第II次S K27	D-3	B区S K108	第II次S K47	E-3
B区S K69	第II次S K08	D-5	B区S K89	第II次S K28	E-3	B区S K109	第II次S K48	E-2
B区S K70	第II次S K09	D-5	B区S K90	第II次S K29	D-4	B区S K110	第II次S J02	C-3
B区S K71	第II次S K10	D-4	B区S K91	第II次S K30	D-4 E-4	B区S D12	第II次SD01	D-3・4 E-3・4
B区S K72	第II次S K11	D-4	B区S K92	第II次S K31	D-4 E-4	B区S D13	第II次SD02	D-3 E-3
B区S K73	第II次S K12	D-4	B区S K93	第II次S K32	C-2・3	B区S D14	第II次SD04	E-5・6・7・8
B区S K74	第II次S K13	D-4	B区S K94	第II次S K33	B-3 C-3	B区S D15	第II次SD05	E-5・6・7・8
B区S K75	第II次S K14	D-6	B区S K95	第II次S K34	D-4 E-4	B区S D16	第II次SD06	C-5 D-4・5 E-4
B区S K76	第II次S K15	D-6	B区S K96	第II次S K35	E-5	B区S D17	第II次SD07	D-7
B区S K77	第II次S K16	D-6 E-6	B区S K97	第II次S K36	D-5	B区S D18	第II次SD08	E-2・3・4 F-2・3
B区S K78	第II次S K17	D-5・6 E-5・6	B区S K98	第II次S K37	C-4・5	B区S D19	第II次SD09	D-3 E-3
B区S K79	第II次S K18	D-6	B区S K99	第II次S K38	C-3			

Ⅲ 遺跡の概要

稲荷前遺跡は、埼玉県坂戸市大字竹之内字稲荷前に所在し、南北250m、東西500mの範囲に広がる。発掘調査面積は49,500㎡におよび、遺跡は調査区西側へも続いている。本報告の発掘調査は調査区北端の坂戸市大字竹之内字稲荷前141番地他の1,530㎡を対象とし、平成13年4月から5月まで実施された。稲荷前遺跡は北側に沖積低地を臨む毛呂台地北東部先端の低台地上に立地する。入西遺跡群の西端に位置し、東に田島遺跡、北東に桑原遺跡、北に棚田遺跡、南に塚の越遺跡が隣接している。

調査区は浅い谷状地形によってA・B・C区に区分される(第7図)。本報告の対象地点はB区北端部にあたる。調査区全体にわたって古墳時代後期から奈良・平安時代の集落と中世遺構が展開し、またB・C区には帯状に古墳時代前期の集落と方形周溝墓群が黒々と営まれている。稲荷前遺跡の遺構の分布密度は高く、なかでも、A区は入西遺跡群中最も集中する区域である。

発掘調査によって発見された遺構は、A区が竪穴住居跡135軒・掘立柱建物跡52棟・土塼296基・井戸跡46井・溝跡39条・竪穴状遺構5基・小鍛冶遺構1基・茶臼跡1基、B区が竪穴住居跡91軒・掘立柱建物跡15棟・土塼110基・井戸跡17井・溝跡19条・方形周溝墓16基・茶臼跡2基・ピット群、C区が竪穴住居跡87軒・掘立柱建物跡17棟・土塼115基・井戸跡30井・溝跡31条・方形周溝墓19基・竪穴状遺構5基・敷石遺構2基・土塼墓1基・茶臼跡2基・ピット群である。総数、竪穴住居跡313軒・掘立柱建物跡84棟・土塼521基・井戸跡95井・溝跡89条・方形周溝墓35基・竪穴状遺構10基・敷石遺構2基・小鍛冶遺構1基・土塼墓1基・茶臼跡5基を数える。このほか、B区とC区を区分する谷部には、多量の須恵器を出土した包含層が形成されていた(B区包含層)。

既報告調査区の発掘調査は各区ごとに行われ、遺

構番号も各区ごとに附されている。本報告では、発掘調査時の遺構番号を継続するB区の遺構番号に改め、第2表B区II遺構新旧対照表を掲載している。

地点の呼称方法は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づいて、調査区全体を網羅する方眼(グリッド)を設定し、北西隅の杭番号を呼称した。既報告では12m×12m方眼を設定し、北西隅を起点に南北にA・B・C…、東西に1・2・3…とし、A-1の座標値はX=-3,648m、Y=-42,532mとなる。本報告においては対象とする調査区のみを網羅する10m×10m方眼を設定し、A-1の座標値はX=-3,650m、Y=-42,470mとなり、既報告で設定されたグリッドとは合致しない。同一事業における同一遺跡の発掘調査報告書であることを重視すると本報告のグリッド呼称を改める必要性はあるが、グリッド一括遺物の取扱いに問題が生じるため、本報告では調査時に設定したグリッド表示をそのまま使用している。既報告地区と本報告対象地区の位置関係については第6・7図に表し、いずれにも座標値を附している。

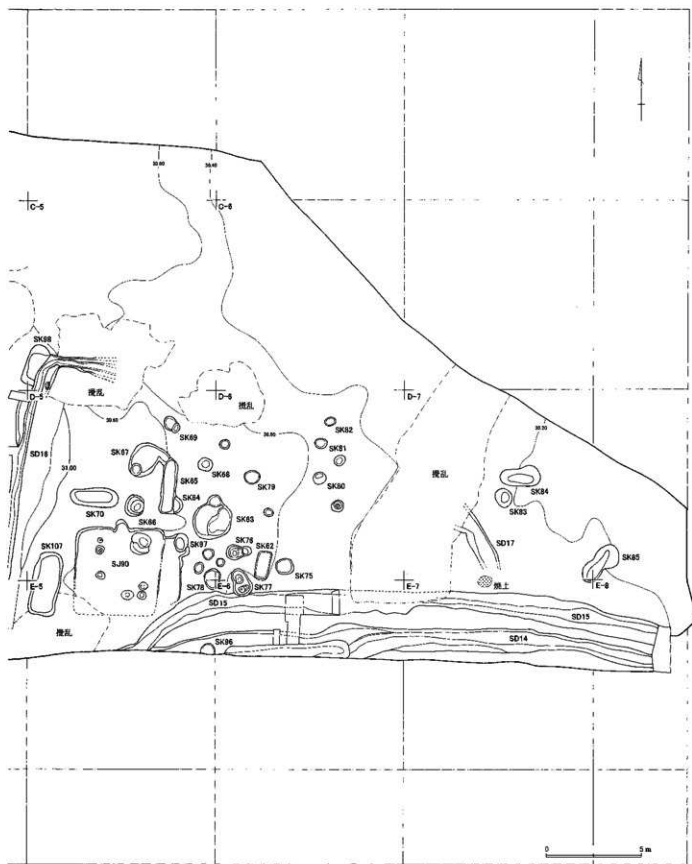
A区は調査区南西部にあたり、7世紀中葉から10世紀初頭頃までの集落が営まれている。

A区第1号住居跡からは円面硯1点、A区第1号井戸跡から墨書七器2点が出土している。内1点は須恵器蓋で、外面には「□(大か) 早郡・『多磨郡男川・「中」尺木・「□□□(郡か)」等と墨書され、内面には「内」の印刻をもつ。他1点は須恵器坏底部に「□(多か)」と書かれている。武蔵国の郡名が複数記載され、注日される資料である。

掘立柱建物跡には、出土遺物から7世紀代と推定されるものが含まれている。8・9世紀代の掘立柱建物跡にも配置に規則性が認められる例や3間×3間の総柱の身舎に3面ないしは4面の庇が設けられた大規模な掘立柱建物跡も検出されている。また、中世期の建物群も併存する。



第5图



稻荷前遺跡B区第II次全測図



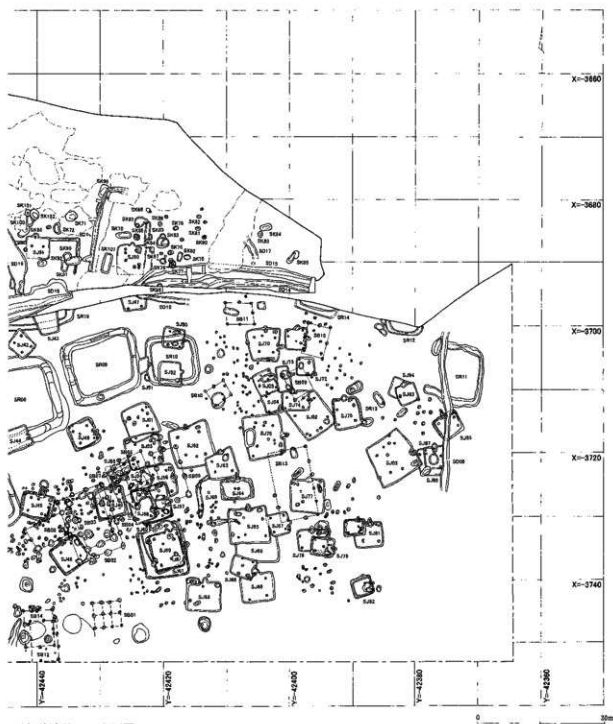
第6図

遺物は上師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・瀬戸美濃系陶器・在地産陶器・瓦類・鉄器・青銅器・木製品・石製品・瓦塔・土製品等が出土している。

B区は調査区北西部にあたり、北側は沖積地と接する。東西に入り込む谷によってA区と区分され、さらに北側から入る谷によってC区と分割される。古

墳時代前期の方形周溝墓群と集落、古墳時代後期～平安時代の集落、中世の遺構群によって構成される。

方形周溝墓は北側の台地縁辺部に帯状に分布し、全局形系統のものを主体としている。古墳時代前期の住居跡は台地内陸部に位置し、方形周溝墓と住居跡の重複関係は認められない。



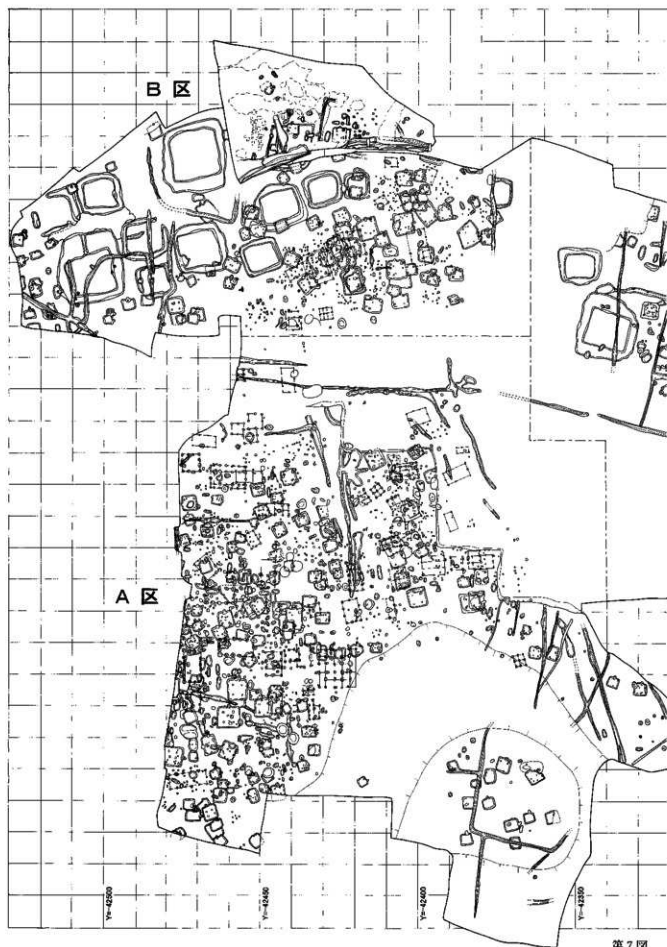
稲荷前遺跡B区全測図

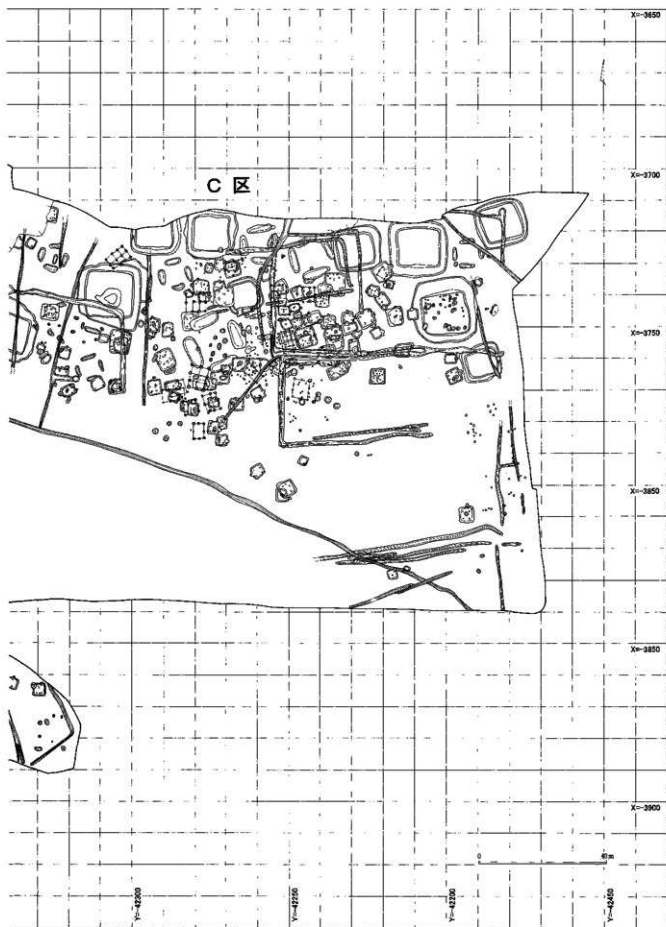
古墳時代後期の住居跡には6世紀前半頃の1軒がみられるが、その後断絶期間を経る。6世紀末～7世紀初頭に本格的な集落域となり、10世紀代に至まで連続と継続する。集落はB区のはば全面に展開し、東半部は住居跡・掘立柱建物跡が激しく重複する。

中世の遺構として溝跡・井戸跡等がみられ、

13～15世紀頃の集落域と推定されている。溝跡のなかには、屋敷等の区画を意図したことが予想されるものも存在する。

出土遺物は土師器・須恵器を主体とする。特筆されるのは、稲荷前タイプとして設定できる小形瓦で、通常の瓦に比して小さく、瓦当文様は類例のない特殊なものである。出土点数は100点を超え、調査区





稲荷前遺跡全測図

内または周辺部に瓦葺きの建物跡の存在を推定させる。

C区は調査区北東部にあたり、北側に棚田遺跡、東側に田島遺跡が隣接する。B区と同様に、古墳時代前期の集落と方形周溝墓群、古墳時代後期から平安時代の集落、中世の遺構群が形成されている。

方形周溝墓はB区と同様に、古地縁辺部を中心に展開する。全周形系統の周溝墓を主体としているが、B区に比べ四隅切周溝墓が相対的に多い。B・C区の方形周溝墓群は桑原A遺跡・広面B遺跡・中耕遺跡に至る一大墓域群を形成している。

古墳時代前期の住居跡は15軒検出され、一部に重複する方形周溝墓との新旧関係から、古墳時代前期に集落域から墓域に転化したことが捉えられる。また5世紀代と推定される土墳墓には、ほぼ完形の鉄剣一振が副葬されていた。

古墳時代後期から平安時代の集落は、C区全域にわたって営まれ、重複例も多い。なかでも、羽釜を伴出した住居跡と思われる遺構は、稲荷前遺跡古代集落の下限を示す資料である。

中世の遺構は井戸跡・溝跡が主体となっている。溝跡には屋敷を区画する堀的な機能が推定される。中世の建物跡は6棟確認されたが、いずれも屋敷推定地外に分布している。井戸跡からは、鎌倉時代末から室町時代の青磁・瀬戸美濃系陶器・常滑甕・在地産軟質陶器類のほか、板碑片・石臼などが出土している。

本報告が対象とする調査区は、B区の北端部にあたる。地形的には北側・東側に向かって傾斜がみられる。北側は棚田遺跡と分割される段丘部、東側はB

区とC区を分かつ谷地へ向かっている。調査区西側から北半部にかけて激しく擾乱され、発見された遺構は少ない。堅穴住居跡2軒・土壇49基・溝跡8米・ビット7本が検出され、稲荷前集落の北限の様相を示している。

B区第90号住居跡は7世紀代の住居跡で、模倣杯系比企型環と長胴甕に象徴される。B区第91号住居跡は図示し得る遺物がなく、時期の特定は難しい。

土壇は出土遺物がなく時期を特定できるものは少ないが、B区第70・72・90号土壇から縄文土器片が出土し、なかでもB区第90号土壇は縄文時代中期後葉の加曾利E式期に比定できる。

溝跡はB区第18・14・15号溝跡が既報告B区第2号溝跡から継続し、遺跡北端部を屈曲しながら東西に走向する可能性がある。B区第12号溝跡は既報告B区第16号方形周溝墓から継続して方形に巡るが、既報告でも疑問視されていたように、他の方形周溝墓と同一に扱うことは難しい。B区第16号溝跡も既報告B区第10号溝跡から継続してコの字に巡る可能性がある。

遺物は土師器・須恵器を中心に縄文時代中・後期の土器片や石器、江戸時代の陶磁器等が出土している。

なかでも、溝跡から古墳時代前期の土師器高坏・小型埴・器台が検出されていることは特筆される。また、D-2グリッドからは63枚の古銭が集中して検出され、うち38枚の寛永通寶のほか、幕末に鑄造された文久永寶8枚が含まれている。さらに、縄文時代晩期末葉の土器片が3点認められ、大洞A式段階に位置づけられる。

IV 遺構と遺物

1. 住居跡

稲荷前遺跡集落からは、住居跡がA区135軒・B区91軒・C区87軒の合計313軒、掘立柱建物跡がA区52棟・B区15棟・C区17棟の合計84棟が発見されている。古墳時代前期から集落形成が開始され、平安時代に至るまで連続と継続されている。

本報告が対象とするのは、B区の住居跡2軒(B区第90・91号住居跡)である。

B区第90号住居跡(第8図)

D-5、E-5グリッドに位置する。遺構の残存状態は悪く、遺構確認面において南半部の床面が既に露呈し、南西コーナー付近は掘乱されている。重複するB区第97号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は方形で、東辺に沿って幅1.1m前後の張出部が付設されている。主軸長は3.9mと推定され、東西幅は4.52m、張出部を含めると最長5.93mを測る。確認面からの深さは最深0.18mほどで、主軸方位はN-4°-Eを指す。埋没状況は自然堆積と思われ、カマド前面には焼土粒子・炭化物粒子を多く含む土層が床面直上に堆積している。

主柱穴はP1・P2の2本である。北西コーナーと南東コーナーを結ぶ対角線上に配列されている。残る2本の主柱穴は検出されていない。覆上の堆積状況から柱は抜き取られ、5層が柱抜取痕の埋没層、6層が柱掘形への充て土の残存と推測される。

壁溝は巡っていない。

床面はカマド周辺の北半部が僅かに窪んでいる。貼床の有無や状況は不明である。

カマドは北壁中央に設置される。袖部は西側が僅かに確認されているにすぎず、燃焼部は幅0.7m×奥行0.6mほどの半円状に張り出し、火床面は平坦である。袖部は西側で僅かに確認されている。燃焼部には多量の焼土が堆積する。

貯蔵穴は、カマド東側付近に付設される。確認はな

いが、平面形態から南北に並んで、2度掘り込まれている。北側の貯蔵穴は長径1.15m×短径0.58~0.75mの不整形を呈し、住居跡床面からの深さは0.42mを測る。底面は平坦である。南側の貯蔵穴は長径1.03mの楕円形で、住居跡床面からの深さは0.07mと浅い。両者の新旧関係は不明で、二段構造の貯蔵穴である可能性も残される。

ピットはP3・P4・P5・P6の4本が検出されている。いずれも掘込みは浅く、配置に規則性や特徴がみられないため、用途・性格は不明である。

遺物はカマド・貯蔵穴およびカマドの前面から集中して出土している。カマド前面には、住居跡床面から若干浮いた状態で、カマド軸と直交する方向に土師器甕が横倒しになっている。カマド掛け口に掛けられていたものが倒壊したか、カマド天井部を補強する芯材として用いられていた可能性が考えられる。

図示したほかに、土師器甕・環・陶片、湖西産と思われる須恵器長頸瓶微細片等が出土している。

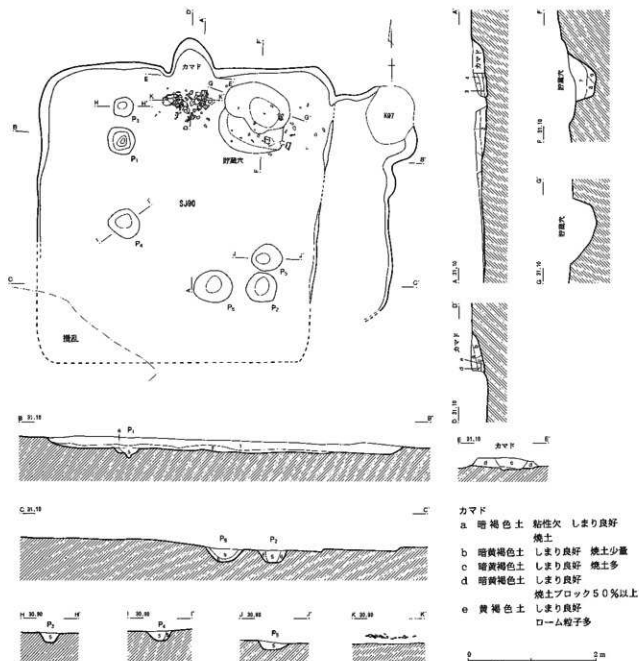
B区第91号住居跡(第10図)

D-3、D-4グリッドに位置する。B区第12号溝跡よりも新しく、重複するB区第106号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は方形である。残存状態が悪く、遺構確認面で南半部の床面は既に露呈し、南壁から西壁にかけて壁の立ち上がりは検出されていない。主軸長3.52m、東西幅3.74m、主軸方位N-0°-Eを測り、確認面からの深さは北壁周辺で0.18mほどである。埋没状況は自然堆積と思われる。

2本柱穴の住居跡で、相対する位置に配置されているP1・P2が主柱穴である。

カマドは北壁中央よりやや西側に設置される。燃焼部は幅0.98m×奥行き0.84mの半円形に張り出し、多量の焼土粒子が堆積する。火床面は住居跡床



B区第90号住居跡

- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠 炭化物粒子・焼土粒子
- 2 暗黄褐色土 粘性欠 しまり弱 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 3 暗褐色土 粘性・しまり欠 炭化物粒子少量 焼土多量
- 4 暗褐色土 粘性・しまり欠 焼土ブロック少量
- 5 暗褐色土 しまり弱 焼土・ローム粒子
- 6 黄褐色土 ローム粒子

貯蔵穴

- 7 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック多
- 9 暗黄褐色土 ローム粒子

カマド

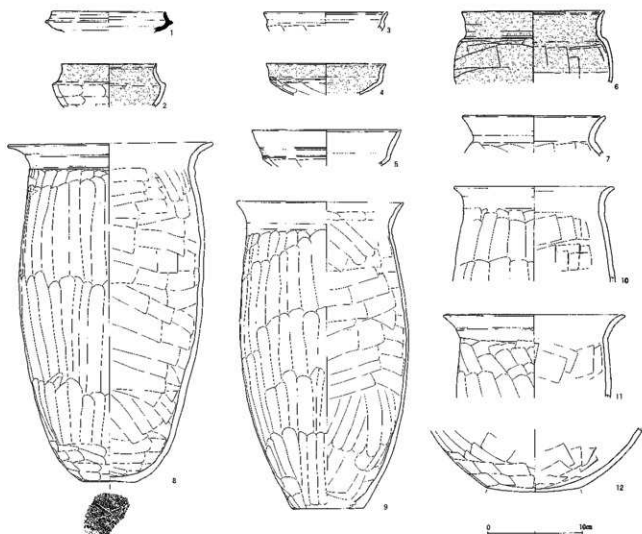
- a 暗褐色土 粘性欠 しまり良好 焼土
- b 暗黄褐色土 しまり良好 焼土少量
- c 暗黄褐色土 しまり良好 焼土多
- d 暗黄褐色土 しまり良好 焼土ブロック50%以上
- e 黄褐色土 しまり良好 ローム粒子多

第8図 B区第90号住居跡

面よりも僅かに窪み、西側によった位置にP3が掘込まれている。

壁溝・貯蔵穴は検出されていない。

遺物は土師器破片が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。



第9図 B区第90号住居跡出土遺物

第3表 B区第90号住居跡出土遺物観察表 (第9図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器環	(12.0)	(2.2)		ABDE	B	灰	5	南比金産 No65
2	碗	(10.0)	(4.6)		ABDEF	B	明赤褐	10	赤彩 No205
3	環	(13.0)	(2.0)		ABDE	B	にぶい赤褐	5	No36
4	環	(12.6)	(3.3)		ABCDE	B	にぶい段	15	赤彩 No48
5	環	(15.9)	(3.9)		ABDF	B	明赤褐	5	No13
6	小型壺	(15.0)	(7.6)		BDEF	A	明赤褐	10	赤彩 No69
7	甕	(14.9)	(3.9)		ABCG	B	にぶい段	5	No68
8	甕	21.5	35.8	(5.4)	ABCDGF	B	橙	70	底部木炭痕 No102・104・108・110
9	甕	(17.5)	32.2	7.4	ABCDEF	B	橙	50	No90・92・98・99・100・108・112・207・267
10	甕	(16.6)	(10.0)		ABDEF	B	橙	5	
11	甕	(18.6)	(8.7)		ACDEF	B	橙	10	No96・107
12	壺	(6.5)	(9.8)		ABCD	B	明赤褐	5	No62

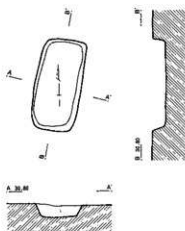
2. 土壌

稲荷前遺跡から発見された土壌は、A区296基・B区110基・C区115基の合計521基を数える。

本報告が対象とするのは、B区の49基（B区第62～110号土壌）である。B区既報告調査区との面積

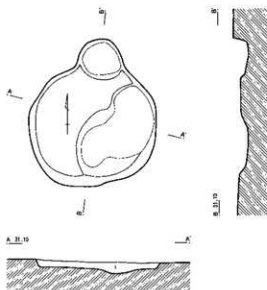
と基数の割合を比較するときわめて多いが、本報告の調査区は集落外辺部にあたり、それが影響していることが予想される。

B区第62号土壌



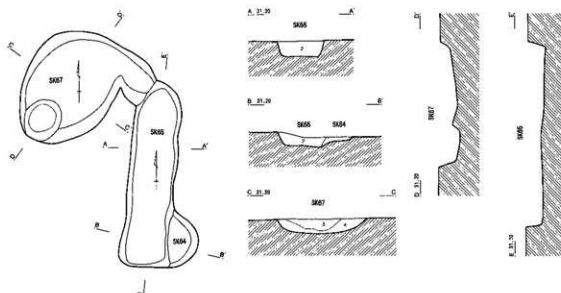
1 黒褐色土 粘性・しまり欠 小礫

B区第63号土壌



1 暗褐色土 粘性・しまり欠 礫多

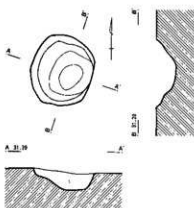
B区第64・65・67号土壌



- 1 暗褐色土 SK64 粘性・しまり欠 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 SK65 粘性・しまり欠 黒色土多量
- 3 暗褐色土 SK67 粘性・しまり欠 ローム粒子少量
- 4 暗黄褐色土 SK67 粘性・しまり欠 ロームブロック多

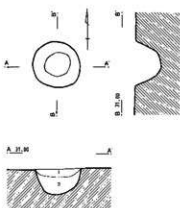
第11図 土壌 (1)

B区第66号土壌



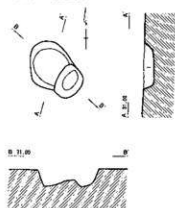
- 1 黒褐色土 粘性・しまり欠
ローム粒子・小石少量

B区第68号土壌



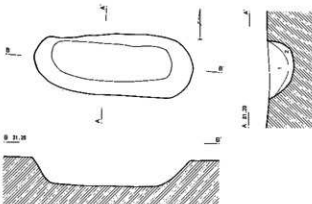
- 1 黒褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子少量
2 暗褐色土 粘性欠 しまり弱 ローム粒子多

B区第69号土壌



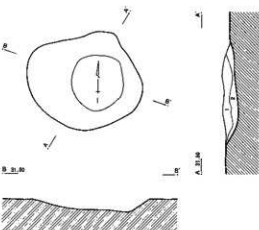
- 1 暗黄褐色土 粘性・しまり欠
ローム粒子多

B区第70号土壌



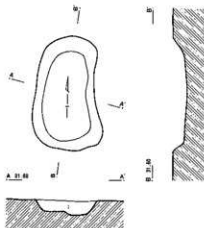
- 1 黒褐色土 粘性欠 しまり良好 炭化物粒子・小礫
2 暗褐色土 粘性欠 しまり良好 ローム粒子・炭化物粒子

B区第71号土壌



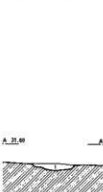
- 1 暗褐色土 粘性欠 しまり良好 炭化物粒子
2 暗黄褐色土 粘性欠 しまり良好 ロームブロック多

B区第72号土壌



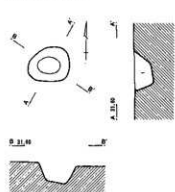
- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子少量

B区第73号土壌



- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠

B区第74号土壌



- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠

第12図 土壌 (2)

B区第62号土壌（第11図）

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長軸長1.46m×短軸長0.70mの長方形を呈する。確認面からの深さは0.22m、長軸方位はN-11°-Eを測る。底面は平坦で、壁は外傾気味に立ち上がる。

遺物は出土していない。

B区第63号土壌（第11図）

D-5・6グリッドに位置する。

東西径2.04m×南北径1.90mの円形の北側に径0.75mほどのピット状の掘込みがみられる。確認面からの深さ0.20m、長軸方位N-19°-Eを測る。底面は東半部が深く掘り込まれている。壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土師器甕・環、近世の内耳鋤等が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第64号土壌（第11図）

D-5グリッドに位置し、重複するB区第65号土壌よりも古い。

本来は径0.84mを超える平面円形である。確認面からの深さ0.08m、長軸方位N-3°-Eを測る。底面は東側から西側に傾斜し、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第65号土壌（第11図）

D-5グリッドに位置する。B区第64号土壌よりも新しく、重複するB区第67号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は長軸長2.92m×短軸長0.27mの長方形を呈する。確認面からの深さ0.27m、長軸方位N-6°-Eを測る。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土師器甕、近世陶器類が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第67号土壌（第11図）

D-5グリッドに位置する。重複するB区第65号土壌との新旧関係は不明である。

長径1.96m×短径1.43mの平面不整形円形の北東部にピット状の張り出しをもち、南東壁際にピット状の掘込みがみられる。確認面からの深さ0.24m、長軸方位N-38°-Eを測る。底面は中央が窪む凹レンズ状で、壁は外傾気味に立ち上がる。

遺物は土師器甕・環が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第68号土壌（第12図）

D-5グリッドに位置する。

平面形態は長径1.10m×短径0.96mの円形を呈し、途中で段をもつ二段構造である。確認面からの深さ0.32m、長軸方位N-23°-Wを測る。底面は直線的で、北側に向かって傾斜をもつ。

遺物は土師器甕が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第68号土壌（第12図）

D-5グリッドに位置する。

平面形態は長径0.74m×短径0.72mの円形を呈する。確認面からの深さ0.34m、長軸方位N-90°-Eを測る。底面は凹レンズ状である。

遺物は出土していない。

B区第69号土壌（第12図）

D-5グリッドに位置する。

平面形態は径0.62m前後の不整形円形を呈し、東側にピットが掘り込まれている。確認面からの深さ0.16m、長軸方位N-50°-Wを測る。底面は南東から北西に傾斜をもち、壁は外傾しながら直線的に立ち上がる。

遺物は出土していない。

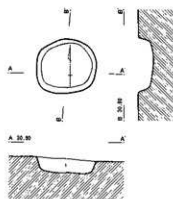
B区第70号土壌（第12図）

D-5グリッドに位置する。

平面形態は長軸長2.52m×短軸長0.94mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さ0.40m、長軸方位N-86°-Wを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

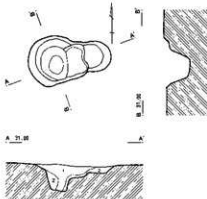
遺物は縄文時代早期条痕文系・前期黒浜式・中期後葉・晩期末葉の土器片が出土している（第18図）。

B区第75号土壤



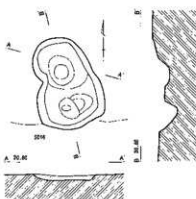
- 1 暗褐色土 粘性欠・しまり強
ローム粒子・黒色土少量

B区第76号土壤



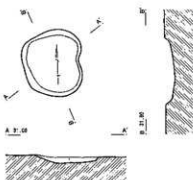
- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子
2 暗黄褐色土 粘性・しまり欠
ロームブロック多量

B区第77号土壤



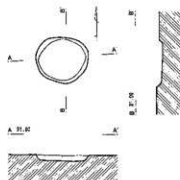
- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠
ローム粒子少量

B区第78号土壤



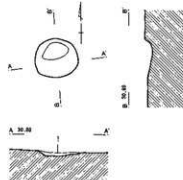
- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠
ローム粒子少量

B区第79号土壤



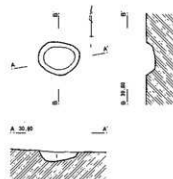
- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠
黒色土粒子少量

B区第80号土壤



- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠
ローム粒子少量

B区第81号土壤



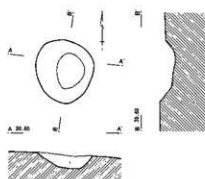
- 1 暗黄褐色土 粘性欠・しまり良好
小礫多

B区第82号土壤



- 1 暗黄褐色土 粘性・しまり欠
小礫多

B区第83号土壤



- 1 黒褐色土 粘性良好・しまり欠
小礫多

0 1 2 m

第13図 土壤 (3)

B区第71号土壌 (第12図)

D-4グリッドに位置する。

平面形態は長径1.86m×短径1.40mの不正円形を呈する。確認面からの深さ0.20m、北辺方位N-70°-Wを測る。底面は西から東に向かって僅かな傾斜をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第72号土壌 (第12図)

D-4グリッドに位置する。

平面形態は長径1.78m×短径0.88mの不正楕円形を呈する。確認面からの深さ0.22m、長軸方位N-8°-Eを測る。底面は東側に窪みをもち、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は縄文時代中期後葉の土器片(第18図)のほかに、土師器甕・環、南比企産の須恵器環が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第73号土壌 (第12図)

D-4グリッドに位置していたが、断面図のみの記載で、平面図が記録されていなかった。確認面からの深さ0.12mほどで、底面は凹レンズ状、壁の立ち上がりは緩やかである。

B区第74号土壌 (第12図)

D-4グリッドに位置する。

平面形態は長径0.66m×短径0.54mの円形を呈する。確認面からの深さ0.18m、長軸方位N-85°-Eを測る。底面は北から南へ傾斜し、壁の立ち上がりは直線的に外傾する。

遺物は出土していない。

B区第75号土壌 (第13図)

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長軸長0.94m×短軸長0.84mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さ0.21m、長軸方位N-89°-Eを測る。底面はやや平坦であり、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第76号土壌 (第13図)

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長径1.32m×短径0.56mの不正楕円形を呈する。確認面からの深さ0.44m、長軸方位N-83°-Eを測る。ピット状の土壌で、三段に掘り込まれている。壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土師器甕・環、近世磁器が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第77号土壌 (第13図)

D-6、E-6グリッドに位置する。重複するB区第16号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形態は長径1.45m×短径0.80mの平面不正楕円形を呈する。確認面からの深さ0.10m、長軸方位N-13°-Wを測る。2本のピット状の掘込みの重なりで、底面は二箇所の凹みがある。

遺物は図示した平瓦片(第18図)のほかに、土師器甕・環が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第78号土壌 (第13図)

D-5・6、E-5・6グリッドに位置する。

平面形態は長径1.04m×短径0.86mの不正円形を呈する。確認面からの深さ0.11m、長軸方位N-8°-Wを測る。底面には僅かな凹凸がみられ、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第79号土壌 (第13図)

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長径0.82m×短径0.72mの円形を呈する。確認面からの深さ0.08m、長軸方位N-87°-Eを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

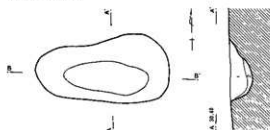
遺物は出土していない。

B区第80号土壌 (第13図)

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長径0.70m×短径0.60mの円形を呈する。確認面からの深さ0.08m、長軸方位N-87°-Eを測る。底面には僅かな凹凸がみられ、南から北へ傾斜している。壁の立ち上がりは緩やかである。

B区第84号土壌



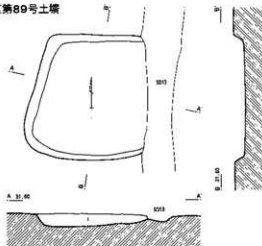
- 1 黒褐色土 粘性・しまり良好 小礫・ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 粘性・しまり良好 礫(φ3cm)多

B区第86号土壌



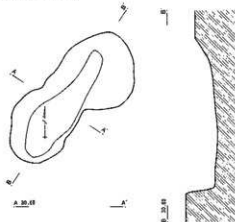
- 1 黒褐色土 粘性・しまり欠 小礫多
- 2 暗褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子・焼土粒子

B区第89号土壌



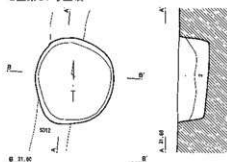
- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子・炭化物粒子少量 小礫多

B区第85号土壌



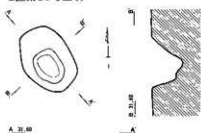
- 1 黒褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子
- 2 黒褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子少量

B区第87号土壌



- 1 黒褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子多

B区第88号土壌



- 1 黒褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子・小礫
- 2 暗褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子多

第14図 土壌 (4)

0 2m

緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第81号土壌（第13図）

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長軸長0.64m×短軸長0.50mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さ0.14m、長軸方位N-85°-Eを測る。底面は北から南へ緩やかな傾斜をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第82号土壌（第13図）

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長軸長0.60m×短軸長0.44mの不整方形を呈する。確認面からの深さ0.09m、長軸方位N-84°-Eを測る。底面は南から北へ傾斜をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第83号土壌（第13図）

D-7グリッドに位置する。

平面形態は長径0.98m×短径0.80mの円形を呈する。確認面からの深さ0.18m、長軸方位N-8°-Eを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第84号土壌（第14図）

D-7グリッドに位置する。

平面形態は長径2.10m×短径0.86mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.34m、長軸方位N-88°-Wを測る。底面には凹凸がみられ、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第85号土壌（第14図）

D-7・8、E-7・8グリッドに位置する。

平面形態は長径2.48m×短径0.76mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さ0.41m、長軸方位N-39°-Eを測る。底面は凹レンズ状で、北から南へ緩やかな傾斜をもつ。壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土師器・環が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第86号土壌（第14図）

D-3グリッドに位置する。北半部を攪乱され、重複するB区第103号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は長径2.26m×短径0.32mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さ0.32m、長軸方位N-53°-Eを測る。底面は南西から北東へ緩やかに傾斜し、壁はきわめて緩やかに立ち上がる。

遺物は土師器・環、近世陶器が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第87号土壌（第14図）

D-3、E-3グリッドに位置する。B区第12号溝跡と重複し、新旧関係はB区第87号土壌のほうが新しい遺構と判断される。

平面形態は長径1.35m×短径1.24mの円形を呈する。確認面からの深さ0.47m、長軸方位N-5°-Eを測る。底面は平坦である。壁は直線状に立ち上がる。

遺物は出土していない。

B区第89号土壌（第14図）

E-3グリッドに位置する。東側に重複するB区第13号溝跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は南北軸長1.98mの台形を呈する。確認面からの深さ0.18m、長軸方位N-8°-Eを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

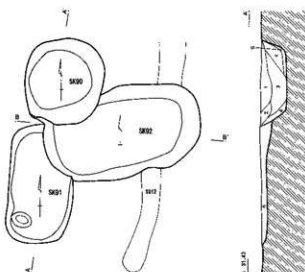
B区第88号土壌（第14図）

D-3グリッドに位置する。

平面形態は長径1.08m×短径0.76mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.48m、長軸方位N-40°-Wを測る。底面にはビット状の窪みをもつ。壁は外傾しながら立ち上がり、南西部は緩やかである。

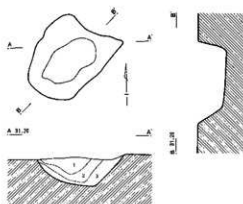
遺物は出土していない。

B区第90・91・92号土墳



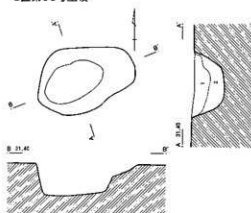
- 1 暗褐色土 SK90 粘性・しまり欠 ローム粒子・炭化物粒子多
- 2 暗黄褐色土 SK90 粘性・しまり欠 ロームブロック多
- 3 黒褐色土 SK90 粘性・しまり欠 ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 SK90 粘性・しまり欠 ロームブロック少量
- 5 暗黄褐色土 SK90 粘性・しまり欠 ロームブロック多
- 6 黒褐色土 SK91 粘性・しまり欠 ローム粒子少量
- 7 黒褐色土 SK92
- 8 暗黄褐色土 SK92
- 9 暗褐色土 SK92

B区第93号土墳



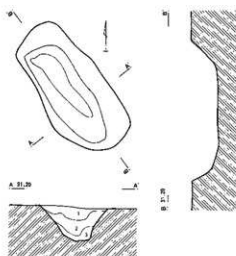
- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 粘性・しまり欠 ロームブロック多
- 3 暗黄褐色土 粘性・しまり欠 ロームブロック・小礫多

B区第95号土墳



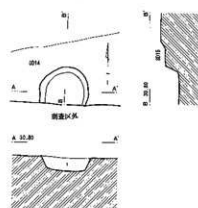
- 1 暗褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗黄褐色土 粘性・しまり欠 小礫多量

B区第94号土墳



- 1 黒褐色土 粘性欠 しまり弱 ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 粘性欠 しまり弱 ローム粒子多 小礫少量
- 3 暗褐色土 粘性欠 しまり弱 小礫・ローム粒子多

B区第96号土墳



- 1 黒褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子少量

第15図 土墳 (5)

0 2m

B区第90号土壌 (第15図)

D-4グリッドに位置する。重複するB区第92号土壌よりも新しい。

平面形態は長軸長1.42m×短軸長1.24mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さ0.40m、長軸方位N-31°-Eを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は縄文時代早期撚糸文系の土器片一片と、中期後葉の加曾利EⅡ式の土器片がまとまって出土している(第18図)。出土遺物から、B区第90号土壌は縄文時代中期後葉の土壌で、重複するB区第91・92号土壌は縄文時代中期以前の土壌として捉えられる。

B区第91号土壌 (第15図)

D-4、E-4グリッドに位置する。重複するB区第92号土壌より古い。

平面形態は長軸長1.86m×短軸長1.00mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さ0.08m、長軸方位N-6°-Eを測る。底面は南から北へ緩やかな傾斜をもち、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は出土していない。

B区第92号土壌 (第15図)

D-4グリッドに位置する。B区第90号土壌よりも古く、B区第91号土壌よりも新しい。重複するB区第12号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形態は長軸長2.51m×短軸長1.39mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さ0.20m、長軸方位N-74°-Eを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土師器甕が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第93号土壌 (第15図)

C-2・3グリッドに位置する。

平面形態は長径1.82m×短径1.15mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さ0.44m、長軸方位N-67°-Eを測る。底面は西から東へ緩やかな傾斜をもつ。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は出土していない。

B区第95号土壌 (第15図)

D-4、E-4グリッドに位置する。

平面形態は長径1.60m×短径0.84mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さ0.52m、長軸方位N-70°-Eを測る。北東壁中段に稜をもつ掘形で、底面は平坦である。

遺物は出土していない。

B区第94号土壌 (第15図)

B-3、C-3グリッドに位置する。

平面形態は長径2.20m×短径0.89mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さ0.52m、長軸方位N-36°-Wを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土師器甕が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第96号土壌 (第15図)

E-5グリッドに位置し、南半は調査区外にある。重複するB区第15号溝跡との新旧関係は明確ではない。

平面形態は径0.78mほどの円形と思われる。確認面からの深さ0.18m、長軸方位N-82°-Wを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第97号土壌 (第16図)

D-5グリッドに位置する。重複するB区第90号住居跡との新旧関係は不明である。

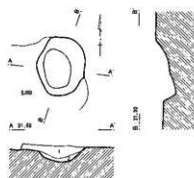
平面形態は長径0.92m×短径0.74mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.20m、長軸方位N-18°-Eを測る。底面には凹凸がみられ、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土師器甕・環が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第98号土壌 (第16図)

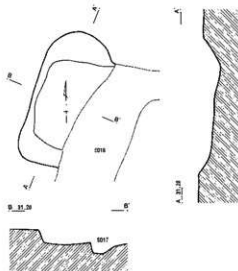
C-4・5グリッドに位置する。重複するB区第16号溝跡との新旧関係は不明である。

B区第97号土壌

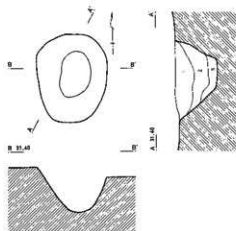


- 1 黒褐色土 粘性欠 しまり弱 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 粘性欠 しまり弱 ローム粒子多量

B区第98号土壌

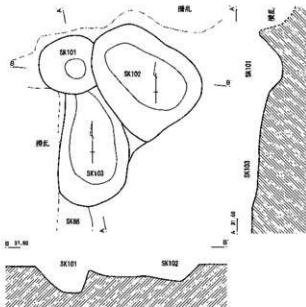


B区第99号土壌

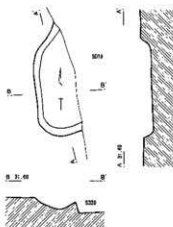


- 1 黒褐色土 しまり良好
- 2 暗褐色土 しまり良好 黄褐色砂
- 3 暗黄褐色土 しまり欠

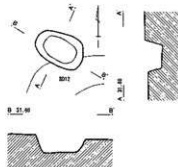
B区第101・102・103号土壌



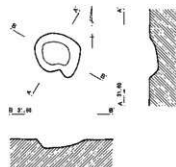
B区第104号土壌



B区第105号土壌



B区第106号土壌



第16図 土壌 (6)

0 1 2 m

平面形態は長軸長2.18mほどの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さ0.28m、長軸方位N-22°-Eを測る。底面は南から北へ傾斜し、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は土師器・土器・土釘が出土しているが、微細な破片のため図示できない。

B区第99号土壌（第16図）

D-3グリッドに位置する。

平面形態は長径1.40m×短径1.10mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.62m、長軸方位N-29°-Eを測る。底面は凹レンズ状で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は出土していない。

B区第101号土壌（第16図）

D-3グリッドに位置する。重複するB区第102号土壌・B区第103号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は長径0.99m×短径0.96mの円形を呈する。確認面からの深さ0.38m、長軸方位N-44°-Eを測る。底面は凹レンズ状で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第102号土壌（第16図）

D-3・4グリッドに位置する。重複するB区第101号土壌・B区第103号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は長径1.85m×短径1.30mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.30m、長軸方位N-51°-Wを測る。底面は西から東へ傾斜をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第103号土壌（第16図）

D-3グリッドに位置する。重複するB区第86号土壌・B区第101号土壌・B区第102号土壌との新旧関係は不明である。

平面形態は現存長径1.04m×短径1.00mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.28m、長軸方位

N-11°-Wを測る。底面は南から北へ傾斜をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第104号土壌（第16図）

E-3グリッドに位置する。重複するB区第19号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形態は長軸長1.69mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さ0.15m、長軸方位N-12°-Wを測る。底面は東西方向に凹みをもつ。壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第105号土壌（第16図）

D-3グリッドに位置する。重複するB区第12号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形態は長軸長0.78m×短軸長0.50mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さ0.33m、長軸方位N-60°-Wを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第106号土壌（第16図）

D-3グリッドに位置する。重複するB区第91号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形態は長径0.74m×短径0.62mの不整形円形を呈する。確認面からの深さ0.17m、長軸方位N-60°-Wを測る。底面は北東から南西へ傾斜をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

B区第107号土壌（第17図）

D-5、E-5グリッドに位置する。

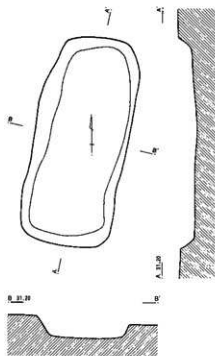
平面形態は長径3.34m×短径1.46mの長方形を呈する。確認面からの深さ0.36m、長軸方位N-11°-Eを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

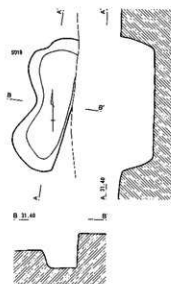
B区第108号土壌（第17図）

E-3グリッドに位置する重複するB区第19号溝跡との新旧関係は不明である。

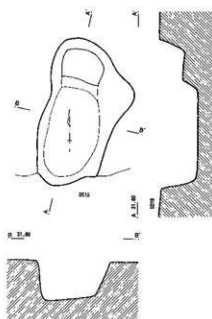
B区第107号土坑



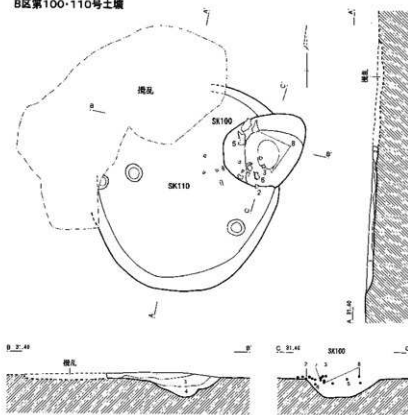
B区第108号土坑



B区第109号土坑



B区第100・110号土坑



B区第110号土坑

1 黑褐色土 粘性・しまり欠
ローム粒子微量

2 黒褐色土 粘性・しまり欠
ローム粒子多量

B区第100号土坑

3 暗褐色土 粘性・しまり欠
焼土多 炭化物粒子少量

4 暗黄褐色土 粘性欠 しまり弱
焼土・ローム粒子少量

第17図 土坑 (7)

平面形態は長軸長2.08mの不整形を呈する。確認面からの深さ0.54m、長軸方位N-7°-Eを測る。底面は平坦で、壁は内湾気味に立ち上がる。

遺物は出土していない。

B区第109号土壌（第17図）

E-2グリッドに位置する。重複するB区第18号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形態は長径2.34m×短径1.14mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さ0.64m、長軸方位N-11°-Eを測る。北側に段をもつ二段構造の掘形で、底面は東から西へ傾斜をもつ。壁はやや内湾気味に立ち上がる。

遺物は出土していない。

B区第100号土壌（第17図）

C-3グリッドに位置する。重複するB区第110号土壌よりも古い。

平面形態は長径1.42m×短径1.08mの不整円形を呈する。確認面からの深さ0.30m、長軸方位N-63°-Eを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりはきわめて緩やかである。

B区第110号土壌（第17図）

C-3グリッドに位置する。重複するB区第100号土壌よりも新しい。北西部は擾乱されている。

平面形態は長径3.42m、短径2.57m以上の円形を呈する。確認面からの深さ0.09m、長軸方位N-29°-Eを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

B区第100号土壌・B区第110号土壌が重複する箇所には遺物が集中している。図示したほかに、土師器甕・坏片、南比企産の須恵器甕片が出土している。
土壌出土遺物（第18図）

発見された多くの土壌からは遺物が全く出土していない。また出土した土壌の遺物量はきわめて少なく、多くの遺物が微細な破片のため図示し得ないものである。

1はB区第77号土壌から出土した平瓦で、凹面に

は布目痕と板状圧痕、凸面には平行タタキ痕がみられる。焼成は比較的良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

9はB区第110号土壌から出土した砂岩製の砥石である。現存長4.5cm、幅2.0cm、厚さ1.9-2.0cm、重さ22.2gを測る。残存するすべての面に磨痕が認められる。

10-13はB区第70号土壌から出土した縄文土器である。

10は早期条痕文系の土器で、風化著しいが、縦位に施された貝殻条痕がみられる。

11は中期後葉加曾利EⅡ式と思われる深鉢の胴部破片である。浅い条線による渦巻文が描かれる。

12は晩期木葉の薄手で堅緻な土器である。全面に浅い沈線による工字文様の文様が施される。

13は前期黒浜式の深鉢である。単節RLの縄文を横位及び縦位に施文することにより、羽状縄文を表出している。胎土には多量の繊維を含む。

14-22はB区第90号土壌から出土した縄文土器である。

14は早期燃糸文系。表面の風化が著しいが、一段Lの燃糸文が縦走するものと思われる。胎土に多量の長石・角閃石を含む。

15は中期後葉の加曾利E式と推定される。表面の風化が著しい。回線による渦巻文が施されるものと思われる。

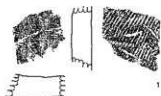
16-22は同一個体と思われる中期後葉の加曾利EⅡ式の大形の深鉢である。曾利式系の土器で、無文の口縁部が大きく開き、胴部には二本隆帯による連結渦巻文が巡る。地文の縄文は単節RLで、区画内には丸棒状工具による浅い刺突文が施される。

23・24はB区第72号土壌から出土した縄文土器である。

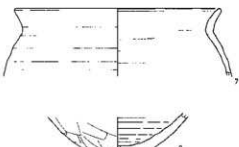
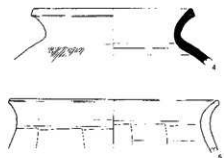
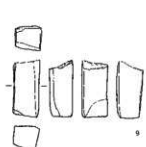
23は中期後葉の加曾利EⅡ式と思われる深鉢胴部破片である。2本沈線による懸垂文が垂下するが、表面は風化が著しく地文は不明である。

24は中期後葉の加曾利EⅡ式のいわゆる連結渦

B区第77号土壤



B区第100·110号土壤



0 10cm

0 10cm

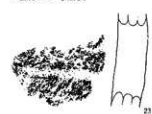
B区第70号土壤



B区第90号土壤



B区第72号土壤



第18图 土壤出土遗物

0 5cm

第4表 土墳出土遺物観察表（第18図）

番号	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
2	坏	(14.8)	(3.8)		BEFG	C	にぶい黄橙	5	SK100・110 No6 ロクロ土師
3	高台付碗	(2.3)	(5.0)		ABCDE	B	にぶい橙	5	SK100・110 No4 ロクロ土師
4	須恵器甕	(16.5)	(5.7)		ACDEG	C	灰白	5	SK100・110 No6・8 風化が著しく調整痕不明瞭
5	甕	(21.8)	(5.3)		CDEF	B	にぶい黄橙	5	SK100・110 No16
6	甕	(23.8)	(8.9)		ACDEF	B	にぶい橙	10	SK100・110 No1 ロクロ成形
7	甕	(21.6)	(7.2)		ACDEF	B	にぶい橙	5	SK100・110 No2 ロクロ成形
8	甕	(3.5)	(6.8)		E	B	にぶい橙	5	SK100・110 No5・17 ロクロ成形

巻文が施される大型土器胴部下半である。下端には の縄文が縦位に施文される。

二本沈線による懸垂文が垂下し、地文には単節RL

3. 溝跡

稲荷前遺跡から発見された溝跡は、A区39条・B区19条・C区31条の合計89条を数える。

本報告が対象とするのは、B区の8条（B区第12～19号溝跡）である。

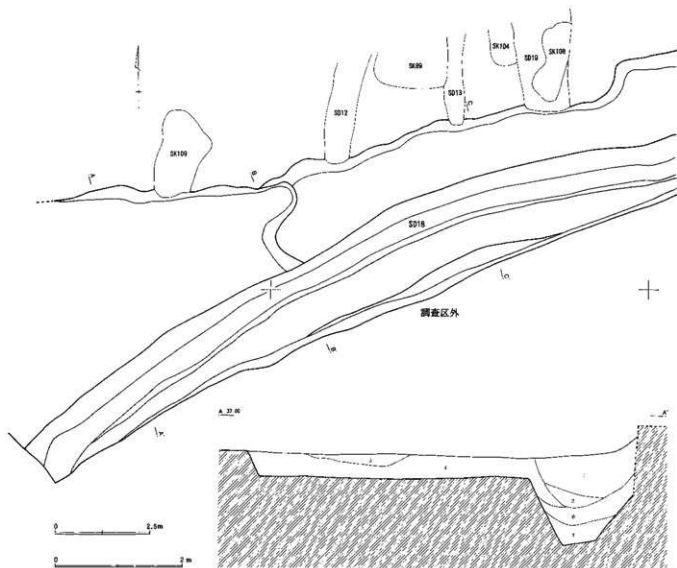
B区第18号溝跡（第19・20図）

E-2・3・4、F-2・3グリッドに位置する東西方向に走る溝跡で、東側・西側ともに調査区外に至る。確証はないが東側に位置するB区第14・15号溝跡に続く同一の溝跡であるとともに、既報告のコの字に屈曲するB区第2号溝跡から継続する可能性もある。

B区第12・13・19号溝跡、B区第109号土壌と重複するが、新旧関係は明確ではない。

検出長は約23.70mで、最大幅2.10m、最小幅1.70m、走向方位N-65°-Eを測る。断面U字形を呈する。底面標高は西端付近が29.96m、中央付近が30.15m、東端付近が30.27mであり、底面は東から南へ若干の傾斜をもつ。

遺物はE-3グリッド北壁際から古墳時代前期の土師器器台が検出されている（第19図）。図示したほかに、土師器甕・坏、南比企産の須恵器甕・坏、



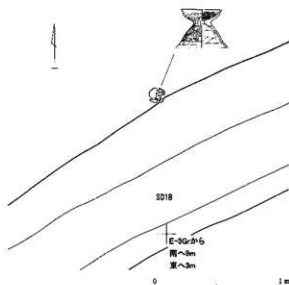
第20図

近世陶磁器類等が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第14号溝跡（第21図）

E-5・6・7・8グリッドに位置する東西方向に走る溝跡で、東側・西側ともに調査区外に至る。平行するB区第15号溝跡との関連が予想され、確証はないが西側に位置する第18号溝跡から継続する同一の溝跡である可能性もある。B区第96号土壌と重複するか、新旧関係は不明である。

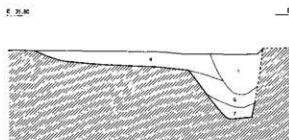
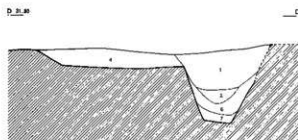
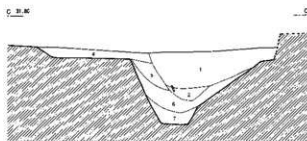
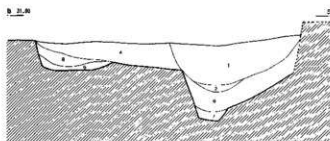
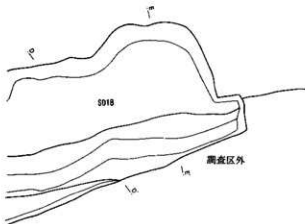
検出長は約28.20mで、最大幅1.70m、最小幅0.70m、走向方位N-88°-Wを測る。断面は逆台形を呈する。底面標高は西端付近が30.57m、中央



第19図 B区第18号溝跡遺物出土状況

B区第18号溝跡

- | | | | |
|---|-------|-----------------|--------------|
| 1 | 黒褐色土 | しまり強 | 小礫多 |
| 2 | 黒褐色土 | しまり弱 | 砂・礫多 |
| 3 | 暗褐色土 | 4よりも砂礫少ない。 | |
| 4 | 暗褐色土 | しまり弱 | 砂・礫少量 |
| 5 | 黒褐色土 | 6と同じだが砂礫がやや少ない。 | |
| 6 | 黒褐色土 | しまり弱 | 砂・礫多 |
| 7 | 暗黄褐色土 | しまり欠 | 砂・礫・黄褐色砂多 鉄分 |
| 8 | 暗褐色土 | 砂礫多 | |
| 9 | 暗黄褐色土 | 砂礫多 | |



B区第18号溝跡

付近が30.29m、東端付近が30.27mであり、底面は西から東へ若干の下り傾斜をもつ。

遺物は図示した板破片(第25図)のほかに、土師器甕・坏、南比企産の須恵器甕・坏、近世陶器甕・摺鉢等が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第15号溝跡(第21図)

E-5・6・7・8グリッドに位置する東西方向に走る溝跡で、東側・西側ともに調査区外に至る。平行するB区第14号溝跡との関連が予想され、確認はないが西側に位置する第18号溝跡から継続する同一の溝跡である可能性もある。B区第77号土塙と重

複するが、新旧関係は不明である。中央付近のE-6・7グリッド付近は擾乱されている。

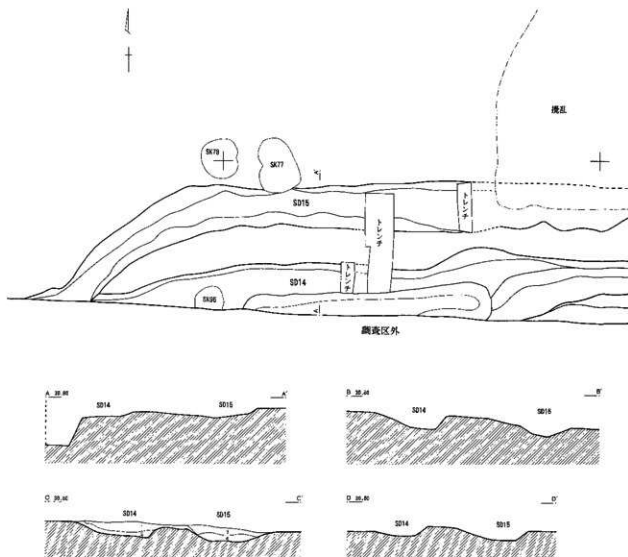
検出長は約28.6mで、最大幅1.40m、最小幅0.90m、走向方位N-90°-Wを測る。断面逆台形を呈する。底面標高は西端付近が30.56m、中央付近が30.44m、東端付近が30.23mであり、底面は西から東へ若干の下り傾斜をもつ。

遺物は出土していない。

B区第17号溝跡(第21図)

D-7グリッドに位置する。北側は擾乱され、南側は検出できなかった。

検出長は約3.00mで、最大幅1.50m、最小幅0.90



第21図

m、走向方位N-27°-Wを測る。断面逆台形を呈する。底面標高は南端付近が30.20m、中央付近が30.21m、北西端付近が30.21mであり、底面はほぼ水平を保っている。

遺物は土師器・土師器が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

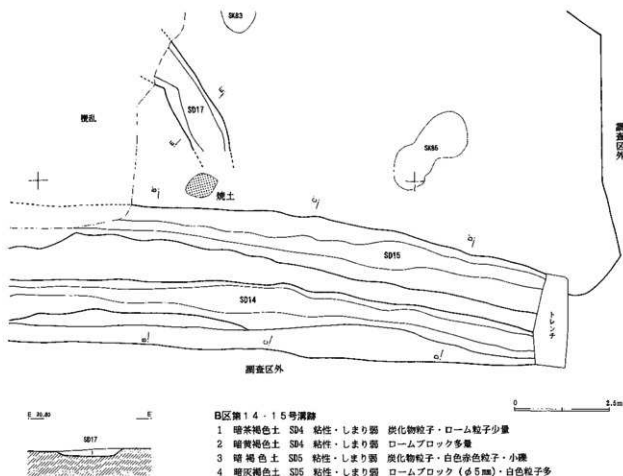
B区第12号溝跡 (第22図)

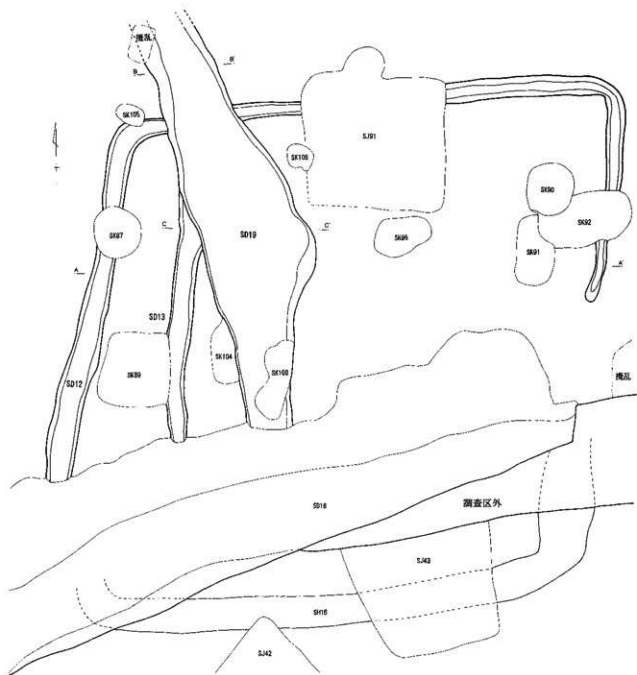
D-3・4、E-3・4グリッドに位置する。重複するB区第91号住居跡よりも古く、B区第18・19号溝跡、B区第87・92・105号土坑との新旧関係は不明である。

コの字状に巡る溝跡である。既報告のB区第16号

方形周溝墓から続く溝跡と推定される。B区第16号方形周溝墓は既報告でも、幅が狭く、深さも浅く、また砂礫が混じる覆土の状況等から疑問視されていた遺構である。B区第12号溝跡がB区第16号方形周溝墓と同一の遺構であれば、方形周溝墓と捉えることは難しい。本報告では、東辺に開口部をもつ方形に巡る溝跡として扱う。

検出長は東辺約5.7m、北辺約13.2m、西辺約9.6m、総延長約28.5mにおよぶ。最大幅0.80m、最小幅0.25mを測る。走向方位は東辺がN-8°-E、北辺がN-85°-E、西辺がN-12°-Eを指す。断面は逆台形を呈する。底面標高は東辺南端が31.11





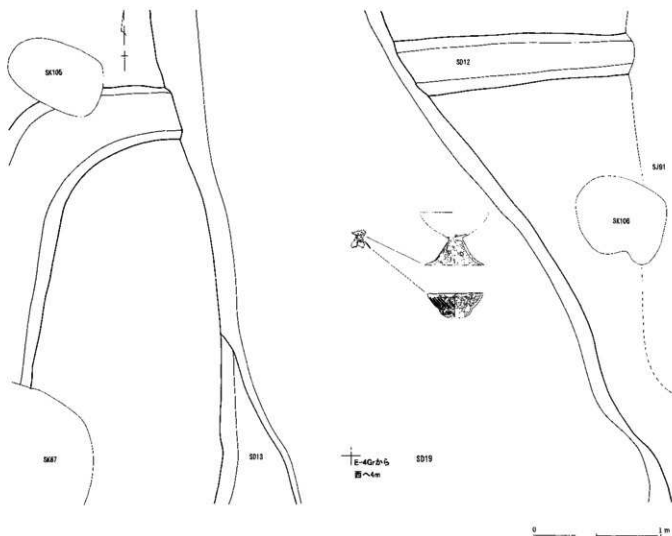
B区第12号溝跡

1 黒褐色土 粘性・しまり欠 ローム粒子少量 小礫

B区第19号溝跡

- 1 暗褐色土 しまり弱
- 2 暗黄褐色土 しまり弱 ロームブロック多
- 3 暗黄褐色土 しまり弱 ロームブロック多

第22図 B区第12・13・19号溝跡



第23図 B区第19号溝跡遺物出土状況

m、北東コーナー部が31.12m、北西コーナー部が31.22m、西辺南端付近が31.39mを測り、底面は比較的平坦であるが、南から北へごく僅かな下り傾斜をもつ。

遺物は土師器甕・環、南比余産の須恵器環、かわらけ、近世の染付碗・鍋等が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区第13号溝跡（第22図）

D-3、E-3グリッドに位置する。南側がB区第18号溝跡、北側がB区第19号溝跡、またB区第89号土壇とも重複する。B区第19号溝跡よりも古いが、B区第18号溝跡・B区第89号土壇との新旧関係は明確ではない。

検出長は約7.0mで、最大幅0.60m、最小幅0.40

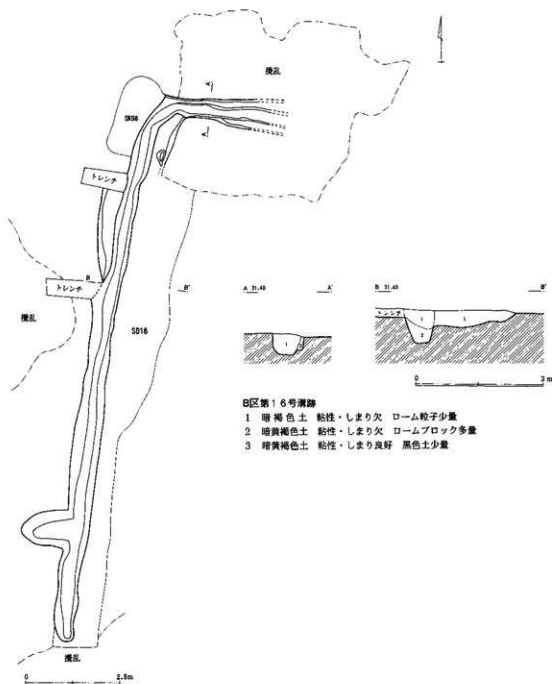
m、走向方位N-6°-Eを測る。断面は逆台形を呈する。底面標高は南端付近が31.29m、中央付近が31.27m、北端付近が31.25mで、底面は南から北へ下り傾斜をもつ。

遺物は出土していない。

B区第19号溝跡（第22図）

D-3、E-3グリッドに位置し、北側は擾乱され、南側は直交するB区第19号溝跡と重複する。またB区第12・13号溝跡とB区第104・108号土壇とも重複する。このうちB区第13号溝跡よりも新しいが、他の遺構との新旧関係は明確ではない。

検出長は約10.8mで、最大幅3.00m、最小幅1.30m、走向方位N-13°-Wを測る。断面は鋭利な三角形を呈し、東から西へ下り傾斜する。底面標高



第24図 B区第16号溝跡

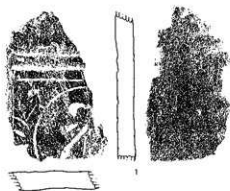
は南端付近が 31.16m 、中央付近が 31.16m 、北端付近が 31.16m であり、底面はほぼ水平を保っている。

遺物は溝内のD-3グリッドから、古墳時代前期の坏部を欠損した高坏の脚部に小型埴が載せられた状態で出土している（第23図）。ほかに土師器甕・坏、近世陶磁器類等が出土しているが、微細な破片のため、図示し得ない。

B区第16号溝跡（第24図）

C-5、D-4・5、E-4グリッドに位置する。C-5グリッドで直角に屈曲する溝跡で、屈曲部以東は攪乱されている。屈曲することに着目すると、既報告のB区第10号溝跡から継続する溝跡で、方形に巡っていた可能性が考えられる。B区第98号土壌と重複するが、新旧関係は明確ではない。

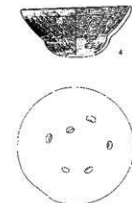
B区第14号溝跡



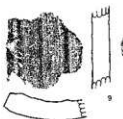
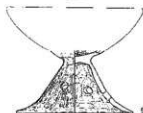
B区第16号溝跡



B区第19号溝跡



B区第18号溝跡



第25図 溝跡出土遺物

第5表 溝跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
2	坏	(10.8)	(2.7)		ABDEG	B	橙	5	SD16 赤彩
4	小壺埴	11.4	(5.2)		ABCDEF	B	橙	60	SD19 赤彩
5	高坏		(6.6)	12.0	ABCE F	B	橙	50	SD19 赤彩 穿孔6
6	器台	(8.4)	8.1	10.9	ABCD	A	にぶい橙	70	SD18 赤彩 穿孔3
7	坏	(11.9)	(2.3)		ABDEF	B	橙	5	SD18 赤彩
8	甕	(25.6)	(6.1)		ABCDEF	B	橙	5	SD18
10	鉢	(30.8)	(6.0)		ABCDEF	B	にぶい黄	5	SD18
11	甕		(12.3)	(13.4)		B	灰白+鉄釉	20	SD18 瀬戸・美濃系陶器 内外面鉄釉施 内面目跡1箇所
12	缸短口	(6.2)	(2.6)			A	白	40	SD18 肥前系磁器 染付絵付(影) 透明釉施
13	小碗		(3.3)	3.0		A	白	45	SD18 瀬戸・美濃系陶器 染付絵付(影) 透明釉施 高台砂付等
14	小碗		(3.2)	(4.4)		A	白	20	SD18 瀬戸・美濃系陶器 染付絵付(折松道) 透明釉施
15	小碗	(7.0)	(4.3)			A	白	15	SD18 肥前系磁器 染付(草木) 透明釉施
16	象櫛		(3.8)			B	灰白+鉄釉	45	SD18 瀬戸・美濃系陶器 台付たろ形 芯立欠損 鉄釉施 底面未切開

検出長は西辺が約14.6m、北辺が約3m、総延長約17.6mで、最大幅0.75m、最小幅0.40m、西辺の走向方位N-11°-Eを測る。断面U字形を呈する。底面標高は南端付近が30.86m、中央付近が30.55m、北西コーナー付近が30.54mであり、底面は南から北へ下り傾斜する。

遺物は図示したほかに、土師器甕・環、かわらけ、近世陶器類等が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

溝跡出土遺物（第25図）

溝跡から出土した遺物は少なく、図示し得る遺物も少ない。

1はB区第14号溝跡から出土した緑泥片岩製の板碑片である。キリーク左上半付近の破片で、長辺

16.3cm、短辺10.4cmほどが残存し、厚さ1.9cmを測る。背面には磨痕が確認され、二次的な転用が認められる。

3はB区第16号溝跡から出土した円筒埴輪のタガ状突帯周辺の破片である。突帯の断面形は台形を呈するが、突出度は低い。外面調整には一次調整のみのタテハケが僅かに確認され、内面調整には指頭によるナデが施されている。焼成は比較的良好で、色調は明赤褐色を呈する。胎土には石英・長石・雲母のほかに、白色針状物質がごく僅かに認められる。

9はB区第18号溝跡から出土した平瓦で、側面部が残存する。凹面には布目痕と板状圧痕、凸面には平行タタキ痕が残存する。焼成は比較的良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

4. ピット

D-5・6グリッドには7本のピットが集中して発見されている。このうちB区II第5号ピットでは柱痕跡が残されているが、組み合わせや配列を把握することができず、建物跡と認定することができなかった。

B区II第1号ピット（第26図）

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長径0.46m×短径0.42mの円形を呈し、確認面からの深さは0.13mを測る。

遺物は土師器片が出土しているが、微細な破片のため図示し得ない。

B区II第2号ピット（第26図）

D-5グリッドに位置する。

平面形態は径0.60mの円形を呈し、確認面からの深さは0.14mを測る。

遺物は出土していない。

B区II第3号ピット（第26図）

D-5グリッドに位置する。

平面形態は長径0.60m×短径0.48mの円形を呈し、確認面からの深さは0.16mを測る。

遺物は出土していない。

B区II第4号ピット（第26図）

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長径0.56m×短径0.54mの円形を呈し、確認面からの深さは0.12mを測る。

遺物は出土していない。

B区II第5号ピット（第26図）

D-6グリッドに位置する。

平面形態は長径0.66m×短径0.63mの円形を呈し、確認面からの深さは0.46mを測る。底面には柱痕跡が認められる。

遺物は出土していない。

B区II第6号ピット（第26図）

D-5グリッドに位置する。

平面形態は長径0.60m×短径0.56mの円形を呈し、確認面からの深さは0.30mを測る。

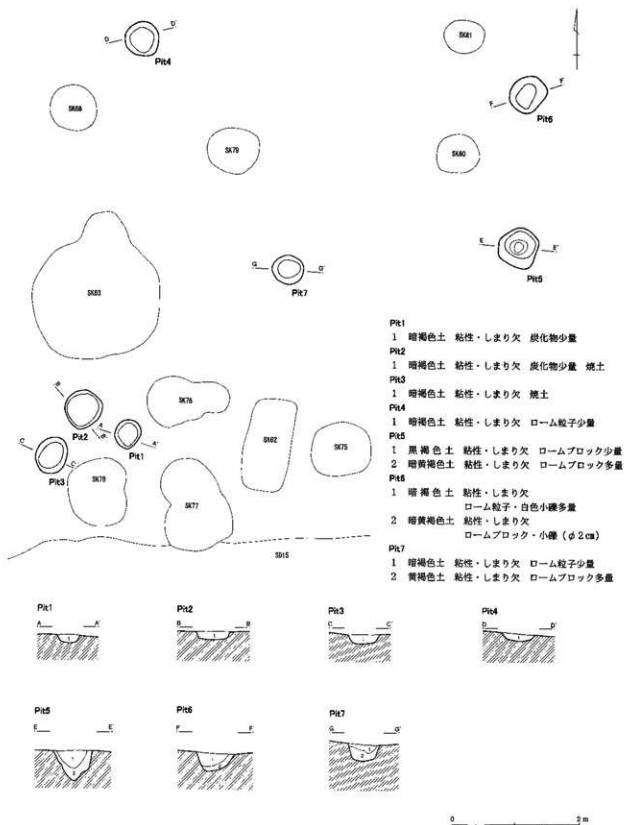
遺物は出土していない。

B区II第7号ピット（第26図）

D-5グリッドに位置する。

平面形態は長径0.50m×短径0.46mの円形を呈し、確認面からの深さは0.29mを測る。

遺物は出土していない。



第26図 ビット

5. グリッド・表採遺物

グリッド遺物 (第27図)

帰属する遺構が不明な遺物をグリッド一括遺物として扱った。当該グリッドに位置する遺構の遺物との接合を試みているが、特定遺構の判明には至らなかった。多くは微細な破片のため、図示し得ないものが多い。

7はD-2グリッドから検出された須恵器甕の肩部片である。外面には焼成前に貼り付いた粘土層が付着する。焼成は普通で、色調は灰色を呈する。南比企産で、胎土に白色針状物質が含まれる。

8はD-2グリッドから検出された鉄釘先端付近の破片である。緩やかなカーブを描き、残存長3.9cm、重さ2.95gを測る。

14はD-6グリッドから検出された須恵器甕の肩部片である。焼成は堅緻で、色調は外面が灰オリーブ色、内面が灰色を呈する。南比企産で、胎土に白色針状物質が含まれる。

表採遺物 (第28図)

4は円筒埴輪で、タガ状突起周辺の破片である。突起の断面形は台形を呈するが、突出度は低い。外面調整は不明であるが、一次調整のみのタテハケと思われる。内面調整には指頭によるナデが施されている。焼成は比較的良好で、色調は橙色を呈する。胎土には石英・長石・雲母が認められる。

5は須恵器甕の口縁部片である。外面には波状文が二段に施文されている。焼成は堅緻で、内外面とも自然釉が付着している。南比企産で、胎土には白色針状物質が含まれる。

6は平瓦片で、端面・側面が残存している。凹面には布目痕と板状汗痕、凸面には平行タタキ痕がみられる。焼成良好、色調はにぶい黄橙色を呈する。

縄文土器 (第29図)

1・2はB区第90号住居跡混入遺物である。

1は前期黑浜式の深鉢である。口唇に沿って半截竹管による押引文が二重に巡り、下部には鋸歯状の

モチーフが展開する。口縁は波状になるものと思われ、地文には二段LRの縄とrの撚り紐を用いた付加糸縄文が施される。胎土には多量の繊維を含む。

2は晩期末葉の薄手で堅緻な土器で、頸部に無文体をもつ深鉢型土器と思われる。「く」の字に屈曲した肩部に沈線が3条巡り、粘土粒が貼付される。下部には一段Rの細かい撚糸文が横走する。

3・4はB区第12号溝跡混入遺物である。

3は中期後葉の加曾利E式と思われる深鉢の胴部破片である。内面は磨かれ、表面には複筋RLRの縄文が横位に施文される。

4は中期後葉の加曾利E式と思われる深鉢である。表面に二本の並行する沈線が認められるが、内外面とも風化著しく地文は不明である。

5はB区第18号溝跡混入遺物で、晩期末葉の鉢と思われる。波状口縁の波頂部片で、肥厚した口縁の段帯部には、幅1cm程の木口状工具による細かい条痕文が施される。上方からの押圧による幅広の口唇上には、角頭状工具による横方向からの刺突が連続して行われる。

6・7はD-3グリッド遺物である。

6は前期諸磯b式の深鉢胴部上半の破片で半截竹管状工具による二本沈線が上下に二条めぐり、地文には単筋LRが横位に施文される。

7は中期後葉の曾利式系の深鉢で、幅2cm程の木口状工具による糸線文が縦位に施文される。

8~10はD-4グリッド遺物である。

8は中期後葉の加曾利E II式と思われ、所謂キャリパー形の人型土器の口縁部と推定される。口唇下には幅広の隆帯が巡る。

9は中期後葉の加曾利E II式と思われ、沈線による懸垂文が垂下する胴部破片と推定される。地文は不明瞭である。

10は中期後葉の加曾利E II式と思われる大型深鉢の胴部下半の破片である。二本沈線による懸垂文

C-3Gr



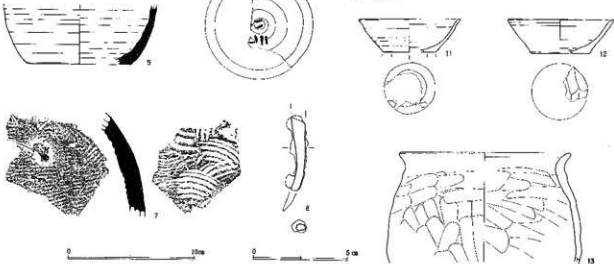
D-2Gr



D-3Gr



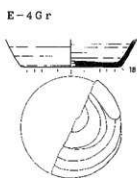
D-5Gr



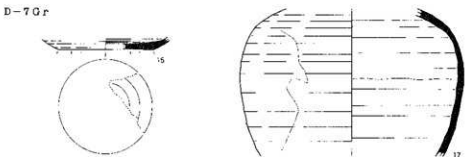
D-6Gr



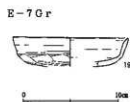
E-4Gr



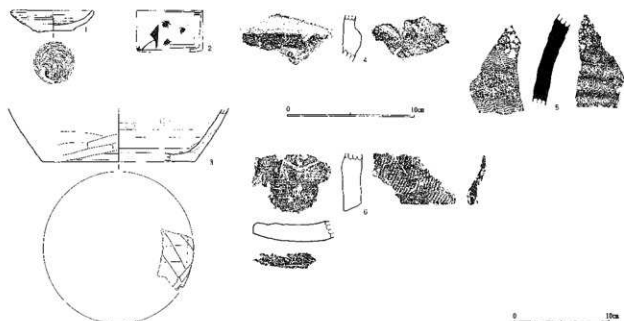
D-7Gr



E-7Gr



第27図 グリッド遺物



第28図 表採遺物

第6表 グリッド遺物観察表 (第27図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(12.6)	(3.3)		E G	B	浅黄	10	C-3 G r 灰陶器 漬け掛け 東遺産
2	須恵器模範				E G	A	灰	5	C-3 G r 陶内産? 外面自然釉付着
3	須恵器鉢			(6.0) (15.0)	D E G	B	灰	5	C-3 G r
4	かわらけ	(9.8)	1.8	5.3	C F G	B	橙	20	D-2 G r 底面糸切離し
5	須恵器壺			(6.2) (11.0)	C D E F G	B	灰	5	D-2 G r 底面回転ヘラケズリ
6	火入	(12.0)	9.1	(11.4)		B	浅黄	30	D-2 G r 江戸在地系 施釉 底面回転ヘラケズリ 墨書
9	高台甕		(2.6)	(8.2)	A B D	C	にぶい橙	5	D-3 G r 南北金産 内面に赤色の付着物
10	須恵器環		(2.0)	(6.6)	D E G	B	灰	10	D-3 G r 南北金産 底面糸切離し
11	環	(10.7)	3.5	5.4	A B D E F	B	にぶい橙	50	D-5 G r ロクロ土師 底面回転ヘラケズリ
12	環	(11.0)	3.6	(6.0)	A E F G	B	にぶい橙	10	D-5 G r ロクロ土師 底面手持ちヘラケズリ
13	小型甕	(17.8)	(11.7)		A B C D E F	B	にぶい黄褐	10	D-5 G r
15	甕		(1.3)	(9.9)	A D E F G	B	灰	10	D-7 G r 南北金産 底面回転ヘラケズリ
16	短頸壺	(11.8)	(7.8)		E G	B	灰	10	D-7 G r 自然釉の付着
17	甕		(15.5)		E G	B	灰	20	D-7 G r 自然釉の付着
18	甕		(3.0)	(10.5)	A B D E G	C	にぶい黄	30	E-4 G r 南北金産 底面回転ヘラケズリ
19	環	(12.2)	(3.1)		A D E F	B	にぶい橙	20	E-7 G r

第7表 表採遺物観察表 (第28図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	かわらけ	(8.4)	2.2	4.3	C E F	B	にぶい橙	60	底面糸切離し内面全体に黒色の付着物
2	小甕	(7.0)	(4.4)			A	白	15	肥前系統器 交付給付(格子文) 透明釉施
3	常滑甕		(5.6)	(16.0)	G	B	オリーブ褐	5	底面手持ちヘラケズリ

が垂下し、地文には単節RLの縄文が縦位に施文される。

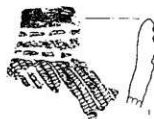
11はE-3グリッド遺物で、中期後葉の加曾利EⅡ式期と思われる大型深鉢の胴部下半の破片である。二本沈線による懸垂文が垂下し、地文には単節RLの縄文が縦位に施文される。

12~14は表採遺物である。

12は早期燃糸文系の黒色の胎土をもつ薄手の土器で、内面には指頭痕が顕著にみられる。表面には単節LRの細かい縄文が全面に施文される。

13は前期諸磯式期の深鉢底部付近の破片である。半截竹管状工具による二本沈線が上下に二条巡

B区第90号住居跡



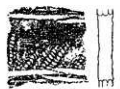
B区第12号溝跡



B区第18号溝跡



D-3 Gr



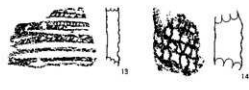
D-4 Gr



E-3 Gr

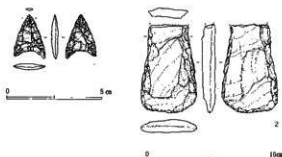


表様



第29図 縄文土器

0 5cm



第30図 石器

第30図 石器

る。地文には単節LRの縄文が横位に施文される。

14は中期後葉の加曾利EⅡ式と思われる深鉢で、

単節RLの縄文が横位に施文される。

石器 (第30図)

1は石鏃で、B区第90号住居跡に混入していた。長さ2.3cm、幅1.65cm、厚さ0.35cm、重さ0.97gを測る。石質はチャートである。完形で、基部には袢りが入り、側縁はやや外湾する。

2は打製石斧で、D-3グリッド遺物である。基部を欠損し、現存長6.95cm、最大幅4.4cm、厚さ1.05cm、重さ43.29g測る。石質は緑色片岩である。刃部の摩耗が著しく、剥離痕は不明瞭である。

V まとめ

稲荷前遺跡は北側に沖積低地を臨む毛呂台地北東端部先端の低台地上に立地し、南北250m、東西500mの範囲に広がる。東に田島遺跡、北東に桑原遺跡、北に棚田遺跡、南に塚の越遺跡、西に長岡遺跡が隣接する。発掘調査は遺跡東半の49,500㎡におよぶ。本報告は調査区北端の1,530㎡を対象とし、住居跡2軒・土塼49基・溝跡8条・ピット7本が発見された。総数、住居跡313軒・掘立柱建物跡84棟・土塼521基・井戸跡95井・溝跡89条・方形周溝墓35基・竪穴状遺構10基・敷石造構2基・小鍛冶造構1基・土塼墓1基・茶毘跡5基・須恵器包含層1カ所を数え、調査区全体にわたって古墳時代後期から奈良・平安時代の集落と中・近世遺構が展開する。また北半部には古墳時代前期の集落と方形周溝墓群が累々と営まれ、東方の広面B遺跡・中耕遺跡に繋がる広大な方形周溝墓域が形成されている。

本報告の対象調査区は、地形的には北側・東側に向かって傾斜をもつ。西側から北半部にかけて激しく攪乱され、発見遺構が少ない。検出された2軒の住居跡も南半部に位置し、攪乱によって消滅した住居跡の存在の可能性は否めないが、既報告での住居跡の分布状況とは明らかに異なる。地形・住居跡分布の状況は、総数313軒もの住居跡が構築された稲荷前集落の北限の様相を示している。

発見された住居跡2軒のうち、B区第91号住居跡からは時期特定が可能な遺物の出土はない。B区第90号住居跡からはカマド前面付近から一括資料が得られているが、個々の遺物の残存率は低い。須恵器の坯身も微細な破片で、口縁部の傾斜度合いや体部の深さなどから年代を推定することは危険であるが、胎土に白色針状物質が含まれる南比企窯跡産であることは注目される。

既報告において、7世紀を前後する頃から10世紀に至る古代集落出土遺物を、I期～XV期の15段階に設定されている。なかでも、7世紀代は比企型環

の小型化と模倣環系比企型環や土師器甕の様相を基軸に段階設定されている。本報告のB区第90号住居跡出土遺物は追加資料となるが、既報告の段階設定を変更する必要性は生じていない。

B区第90号住居跡の環類は模倣環系比企型環を主体にしているが、残存率10%程度の小片であり、推定口径や口縁部の傾斜度合いに不安定さを残す。甕は長胴化が進み、胴部の膨らみが僅かに残り、口縁部の外反度は強弱共存する。これらの諸特徴から既報告のⅡ～Ⅲ段階の7世紀前半代に位置づけることができる。稲荷前古代集落の変遷過程においては、

I・II期の萌芽期に続いて拡大傾向が現れる段階に相当する。B区第90号住居跡の発見は、既に、この段階には集落域北限まで住居跡が展開していた様相を捉えることができる。稲荷前古代集落は人間郡・高麗郡に分布する中核集落のひとつであり、併行する入西遺跡群の諸遺跡とともに、近接する周囲の長岡遺跡・稲荷森遺跡・花見塚遺跡等との関連性のかたで、改めて捉えていく必要がある。

さて、既報告の古代集落の展開とともに注目された資料として小型瓦の存在もあげられる。軒平瓦を欠くが、軒丸瓦・丸瓦・平瓦・隅切瓦があり、出土地点は本報告調査区との境界付近に集中する。瓦の種類や分布状況は瓦葺の建造物の存在を予想させるが、稲荷前遺跡に大規模な伽藍を備えた寺院機能を求めるには無理があり、近年、注目されている小規模な堂宇を備えた「村落内寺院」を想定することもできよう。既報告では、本報告調査区に建造物の存在を想定されているが、残念ながら、小型瓦の出土はなく、また激しく攪乱されていた状況も影響してか、建造物と捉えられる遺構の存在も確認されていない。しかし、低地部に張り出す先端にあたる地形は低地部からの眺望性という意味では最適な立地条件を有し、小規模ながらも堂宇を備えた仏教施設が存在していた可能性は高い。

続いて、中・近世の遺構としては、建物跡が確認されていないが、溝跡・井戸跡が検出されている。調査区間での直接的な繋がりはいみれないうが、B区第18・14・15号溝跡はB区第2号溝跡から継続し、遺跡北端部を柄杓形に屈曲しながら東西に走向する。B区第12号溝跡は既報告で方形周溝築と扱うことに疑問視されていたB区第16号方形周溝墓から継続して方形に巡る。B区第16号溝跡もB区第10号溝跡から継続してコの字に巡る。出土遺物から、これらの溝跡は中世もしくは近世に位置づけられ、方形に区

画することを意図した溝跡である。建物跡が検出されていない状況において断定することはできないが、これらの溝跡が中・近世の屋敷を区画していた可能性は高い。

最後に、縄文時代晩期木葉の土器片3点も注目される。B区第90号住居跡・B区第70号土壇・B区第18号溝跡の混入遺物で、既報告でもこの時期の土器片が4点出土している。いずれも遺構を伴わない出土である。文様等の特徴から大洞A式段階に比定されるものと思われ、特筆される。

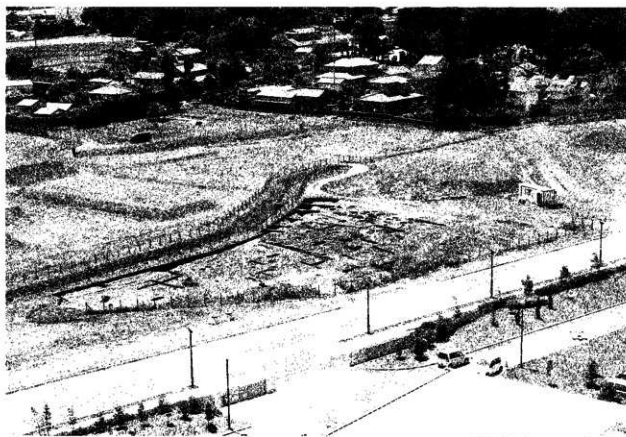
参考文献

- 赤築浩一 1994 『金井遺跡B区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第146集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
石坂俊郎 1995 『田島・棚田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第147集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
馬橋泰雄 1994 『足洗遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第136集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
金井琢良一編 1976 『北武蔵考古学資料図鑑』校倉書房
木戸春夫 2000 『金井遺跡B区II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第249集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県 1980 『新編埼玉県史』資料編1 原始 旧石器・縄文
埼玉県 1982 『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳
埼玉県 1984 『新編埼玉県史』資料編3 古代I 奈良・平安
埼玉県 1987 『新編埼玉県史』通史編1 原始・古代
坂戸市教育委員会編 1983 『坂戸市史』原始史料編 坂戸市
坂戸市教育委員会編 1992 『坂戸市史』古代史料編 坂戸市
坂戸市教育委員会編 1987 『古代のさかど』坂戸市遺跡発掘調査概報I 坂戸市教育委員会
坂戸市教育委員会編 1987 『古代のさかど』坂戸市遺跡発掘調査概報II 坂戸市教育委員会
杉崎茂樹 1993 『中継遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫 1992 『稲荷前遺跡（八区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫 1994 『稲荷前遺跡（B・C区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
東松山市史編集委員会編 1981 『東松山市史』資料編第一巻 原始古代・中世 遺跡・遺構・遺物編 東松山市
辻間孝志 1989 『金井遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第86集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
辻間孝志 1991 『塚の越遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第101集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村田健二 1990 『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村田健二 1992 『桑原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第121集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
渡辺 一 1988 『鳩山窯跡群I』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺 一 1990 『鳩山窯跡群II』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺 一 1991 『鳩山窯跡群III』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
渡辺 一 1992 『鳩山窯跡群IV』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

写真図版



稲荷前遺跡B区Ⅱ調査区遠景



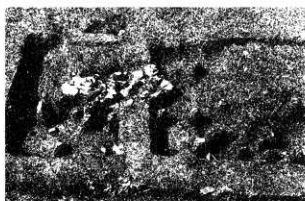
稲荷前遺跡B区Ⅱ調査区全景



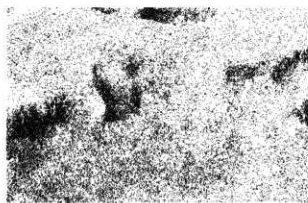
稲荷前遺跡B区Ⅱ調査区近景



B区第90号住居跡



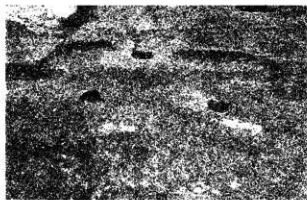
B区第90号住居跡遺物出土状況



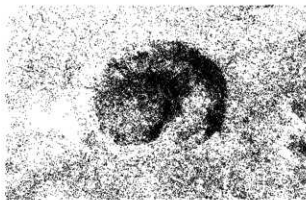
B区第90号住居跡カマド



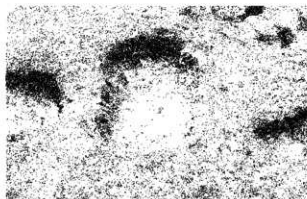
B区第90号住居跡遺物出土状況



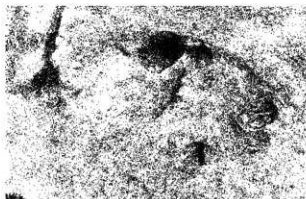
B区第91号住居跡



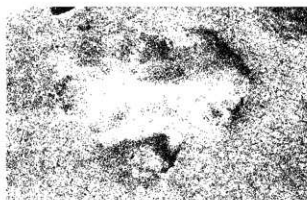
B区第66号土塊



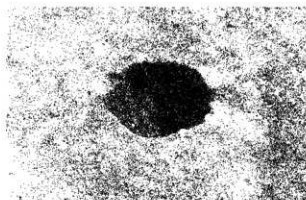
B区第62号土塊



B区第67号土塊



B区第63号土塊



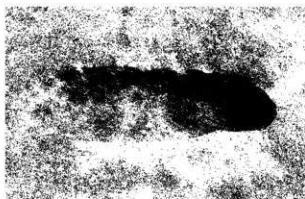
B区第68号土塊



B区第64・65号土塊



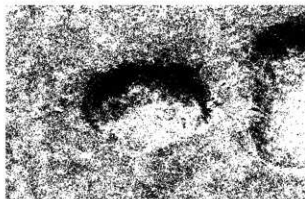
B区第69号土塊



B区第70号土壤



B区第78号土壤



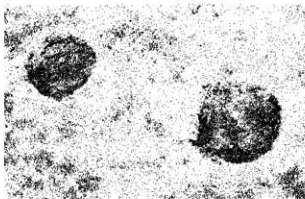
B区第75号土壤



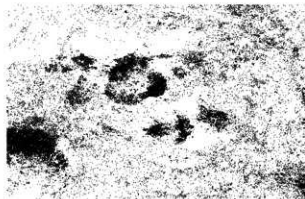
B区第79号土壤



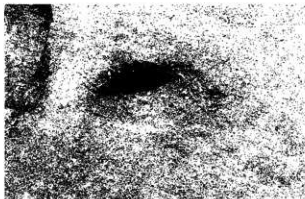
B区第76号土壤



B区第81、82号土壤



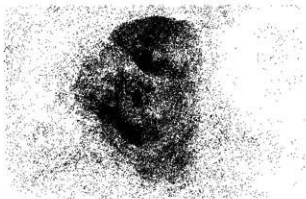
B区第77号土壤



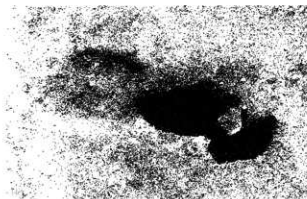
B区第83号土壤



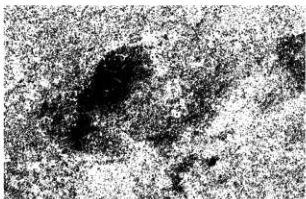
B区第84号土壤



B区第94号土壤



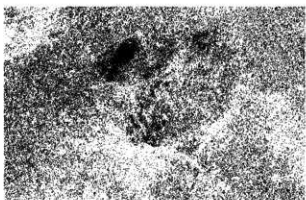
B区第85号土壤



B区第110号土壤



B区第90·91·92号土壤



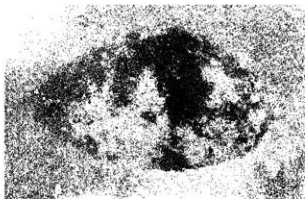
B区第100号土壤



B区第93号土壤



B区第100·110号土壤遺物出土状况



B区第99号土壤



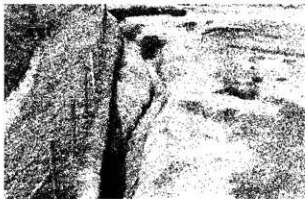
B区第18号沟跡遺物出土狀況



B区第14・15号溝跡



B区第19号溝跡遺物出土狀況



B区第18号溝跡



B区第19号溝跡遺物出土狀況



B区第18号溝跡遺物出土狀況



B区第19号溝跡遺物出土狀況



B区第90号住居跡 第9図-4



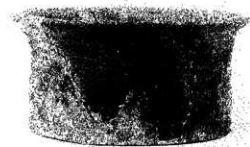
B区第90号住居跡 第9図-2



B区第90号住居跡 第9図-9



B区第90号住居跡 第9図-6



B区第90号住居跡 第9図-11



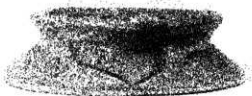
B区第90号住居跡 第9図-8



B区第90号住居跡 第9図-1



B区第18号溝跡 第25図-12



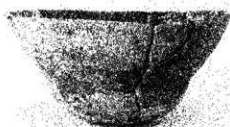
B区第110号土壇 第18図-4



B区第18号溝跡 第25図-16



B区第110号土壇 第18図-6



B区第19号溝跡 第25図-4



B区第18号溝跡 第25図-6



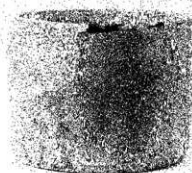
B区第19号溝跡 第25図-5



B区第18号满跡 第25図-11



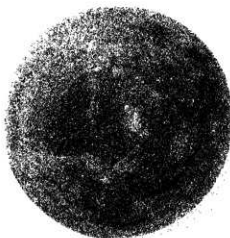
C-3 Gr 第27図-1



D-2 Gr 第27号-6



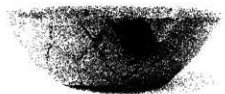
C-3 Gr 第27図-3



D-2 Gr 第27号-4



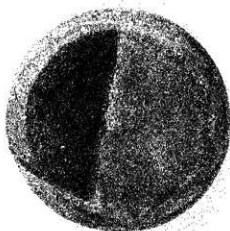
C-3 Gr 第27図-10



D-5 Gr 第27図-11



E-4 Gr 第27図-18



E-7 Gr 第27図-19



D-7 Gr 第27図-16



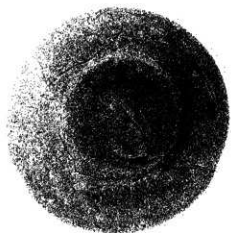
D-5 Gr 第27図-13



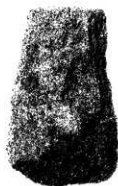
D-7 Gr 第27図-17



石鏃 第30圖-1



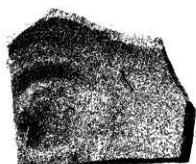
表採 第28圖-1



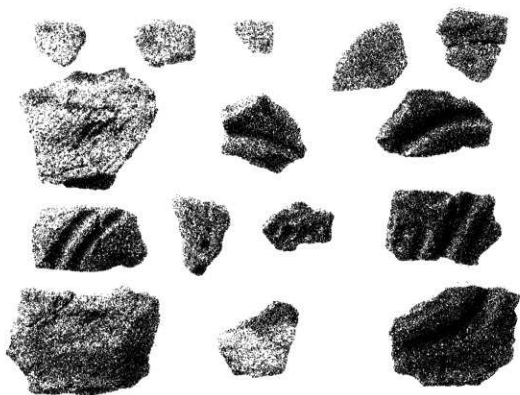
打製石斧 第30圖-2



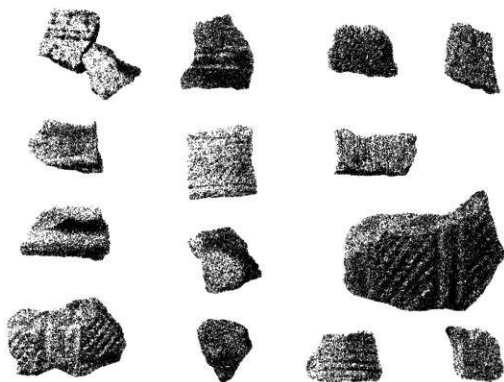
表採 第28圖-3



C-3 Gr 第27圖-2



土壙出土繩文土器 第18図



縄文土器 第29図

報告書抄録

ふりがな	いなりまゐいせきBⅡ							
書名	稲荷前遺跡B区Ⅱ							
副書名	都市基盤整備公団城戸入西地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	ⅩⅡ							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第277集							
編著者名	山本 靖							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1						TEL 0493-39-3955	
発行年月日	西暦2002（平成14）年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
稲荷前遺跡B区Ⅱ	埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地 大字竹之内 大字稲荷前 141番地他	11239	121	35° 57' 55"	139° 22' 00"	20010409 ～20000531	1,530㎡	土地区画 整理に先 立つ事前 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
稲荷前遺跡B区Ⅱ	集落跡	古墳時代後期 中世 近世		住居跡 土壇 溝跡 ピット		2 土師器 49 須恵器 8 灰釉陶器 7 近世陶磁器 縄文土器 瓦 埴輪 板碑 古銭		古墳時代後期 ～平安時代ま で継続された 稲荷前遺跡集 落の北限が判 明 縄文時代晩期 末葉の土器

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第277集

坂戸市

稲荷前遺跡B区Ⅱ

都市基盤整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告
XⅡ

平成14年3月14日 印刷

平成14年3月22日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4丁目4番地1

電話 0493(39)3955

印刷／柳太陽美術